

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第300集

---

川 越 市

---

# 川 越 城 跡 Ⅱ

---

県立川越高等学校校舎改築工事事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 5

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 序

埼玉県では、県立高等学校の学習環境を改善するため、老朽化している校舎の大規模改修、改造を計画的に推進しています。

創立100年を超える県立川越高等学校も、老朽化や地盤沈下等による校舎の損傷が著しく、学習環境の改善を図るため、改築工事が実施されることになりました。

工事予定地は、川越城跡内にあります。川越城は、室町時代の長祿元年（1457）に太田道真・道灌親子が築いたといわれています。戦国時代には後北条氏が在城し、徳川家康が江戸に入城した後は、江戸の北方を守る戦略的拠点として重要視されました。明治維新後は廃城となり、建物の撤去、堀の埋め戻しなどにより、城跡周辺的环境は大きく変化し、城跡は現在、県立川越高等学校の一角となっています。

県立川越高等学校校舎改築計画と文化財保存の取扱いについて、関係機関が慎重に協議を重ねましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、教育局管理部財務課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、江戸時代の川越城の堀跡・土塁跡・井戸跡等が発見され、これまでの調査成果や、幕末に作成された絵図から、川越城本丸西側の八幡曲輪に設けられた馬場と、その外側を区画する堀跡・土塁等であることが明らかとなりました。

本書はこれら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御協力いただきました埼玉県教育局管理部財務課、川越市教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 福田陽充

## 例 言

1. 本書は、川越市郭町に所在する川越城跡の第20次の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。  
川越城跡（略号KWGEJ 遺跡番号№19-86）  
川越市郭町2-6他  
平成14年10月24日付け教文第2-77号
3. 発掘調査は、県立川越高等学校校舎改築工事事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習課文化財保護課が調整し、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査期間と調査担当者は、以下のとおりである。  
平成14年10月1日～平成14年12月20日  
調査担当者 鈴木孝之 安生素明
5. 報告書作成事業は、平成16年2月24日から平成17年3月31日まで栗岡 潤が担当し実施した。なお発掘調査整理作業の組織は第I章-3項に示したとおりである。
6. 遺跡の基準点測量は、(株)シン技術コンサルに委託した。
7. 掲載した遺構写真は、各調査担当者が、遺物写真は栗岡・安生・山北美穂が撮影した。
8. 本報告書の出土品整理・図版の作成は、安生・浅見ふみが、金属製品の実測については滝瀬芳之が、瓦の整理については大谷 徹が行った。
9. 本書の執筆は安生が行い、第I章-1項を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、第IV章-(2)項・金属製品を滝瀬が行った。
10. 金属製品の蛍光X線分析については、大屋道則が行った。
11. 本書の編集は、栗岡が行った。
12. 本書にかかる資料は、平成17年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。  
(敬称略・50音順)  
川越市教育委員会 川越市立博物館  
天ヶ嶋 岳 馬橋泰雄 岡田賢治 荻野将盛  
小泉 功 田中 信 平野寛之

# 凡例

1. 川越城跡におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。
3. 川越城跡におけるグリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…とアルファベットを付し、東西方向は西から1・2・3…と算用数字を付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
4. 遺構図及び実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。同一図中に縮尺の異なる場合は、図中にその都度例示した。

遺構 全体図 1/200

堀跡 1/60

溝跡 1/60

井戸跡 1/60

ビット 1/60

遺物 瓦実測図 1/4

瓦拓影図 1/4

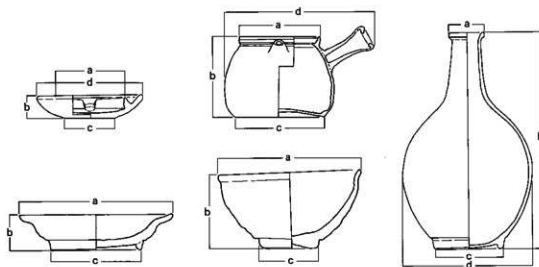
陶磁器実測図 1/3

陶磁器拓影図 1/3

古銭拓影図 1/2

金属製品実測図 1/2

5. 本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。  
溝跡：SD 堀跡：SZ 井戸跡：SE ビット：P
6. 遺構断面図に表記した水準値は、海拔標高を示しており、単位はmである。
7. 挿図で用いた網掛け部分は、遺構種別ごとに凡例が異なるため、その都度凡例を例示した。
8. 遺物観察表は次のとおりである。  
・法量はcmを単位とする（下図参照）。  
・（ ）内の数値は推定値である。< >の数値は残存値である。
7. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/25000、川越市発行の都市計画図1/2500を使用した。
8. 本書に使用した引用・参考文献は、巻末にその一覧表を記載した。



# 目次

序

例言

凡例

目次

I 調査の概要	1	(2) 堀跡・土塁跡	14
1. 調査にいたる経過	1	(3) ビット	35
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(4) 井戸跡	35
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	V 調査のまとめ	36
II 川越城の立地と環境	3	1. 川越城跡の堀跡と土塁について	36
III 遺跡の概要	7	2. 川越城跡の出土遺物について	37
IV 発見された遺構と遺物	10	3. 川越城跡出土の瓦について	38
(1) 溝跡	10		

# 挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3	第14図 第2号堀跡出土遺物 (3)	19
第2図 周辺の遺跡	4	第15図 第2号堀跡出土遺物 (4)	20
第3図 遺跡周辺の地形と調査地点	8	第16図 第2号堀跡出土遺物 (5)	21
第4図 地形図と古地図の合成図	8	第17図 第2号堀跡出土遺物 (6)	22
第5図 川越城跡調査区全体図	9	第18図 第2号堀跡出土遺物 (7)	23
第6図 第1号溝跡・第1号溝跡出土遺物	10	第19図 第2号堀跡出土遺物 (8)	24
第7図 第1号堀跡・第2号堀跡・土塁跡	11	第20図 第2号堀跡出土遺物 (9)	25
第8図 第1号・2号堀跡・土塁跡土層図 (1)	12	第21図 第2号堀跡出土遺物 (10)	26
第9図 第1号・2号堀跡・土塁跡土層図 (2)	13	第22図 第2号堀跡出土遺物 (11)	27
第10図 第1号堀跡出土遺物 (1)	15	第23図 第2号堀跡出土遺物 (12)	28
第11図 第1号堀跡出土遺物 (2)	16	第24図 第2号堀跡出土遺物 (13)	29
第12図 第2号堀跡出土遺物 (1)	17	第25図 ビット	35
第13図 第2号堀跡出土遺物 (2)	18	第26図 第1号井戸跡	35

## 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5
第2表	第1号溝跡出土遺物観察表	11
第3表	第1号堀跡出土遺物観察表	30
第4表	第2号堀跡出土遺物観察表	30
第5表	第2号堀跡出土金属製品観察表	33
第6表	第2号堀跡出土古銭観察表	34
第7表	第2号堀跡出土瓦観察表	34

## 写真図版目次

図版1	第2号堀跡完掘（南東から）	第1号堀跡出土遺物	
	第2号堀跡土層断面（南から）	第1号・第2号堀跡出土遺物	
図版2	第1号堀跡・第2号堀跡・第1号井戸跡	図版4	第1号堀跡出土遺物
	第1号堀跡・第1号土塁土層断面		第2号堀跡出土遺物
	第2号堀跡土層断面（北から）	図版5	第2号堀跡出土遺物
	第1号土塁基部土層断面	図版6	第2号堀跡出土遺物
	第1号溝跡（南から）(1)	図版7	第2号堀跡出土遺物
	第2号堀跡刀装具出土状況	図版8	第2号堀跡出土遺物
	第1号溝跡（北から）(2)	図版9	第2号堀跡出土遺物
図版3	第1号溝跡出土遺物	図版10	第2号堀跡出土遺物

# I 発掘調査の概要

## 1. 調査に至る経過

県立川越高等学校校舎改築工事にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成13年12月5日付け教財第533号で教育局管理部財務課長より文化財保護課長あて照会があった。工事予定地は川越市郭町2-6、県立川越高等学校敷地内であり、工事内容は、校舎が不等沈下によって傾斜し、危険な状況になりつつあるため、既存校舎を解体し同位置に同規模の校舎を建設するというものである。

工事予定地は県指定史跡範囲内及び埋蔵文化財包蔵地内に該当するため、文化財保護課では確認調査を実施し、堀跡の具体的位置を確認した。その結果をもとに、平成13年12月28日付け教文第1323号で次のように回答した。

### 1. 川越越路関係の遺構について

別図のとおり堀跡及び版築・整地遺構が所在している。

### 2. 取扱いについて

新たな掘削により遺構の破壊が生じないよう、改築計画を立案することが望ましい。特に堀跡については、可能な限り現状保存することが望ましい。

その後、財務課及び営繕課、文化財保護課との協議が行われ、校舎の不等沈下を避けるためには基礎杭の打設が必要であること、基礎杭は既存校舎の掘削深度におさめ、最小限の構造にすること、工事によって掘削の生じる箇所については記録保存のための発掘調査を実施することが確認された。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することとし、事業団、財務課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等についての協議が行われた。その結果、発掘調査は、平成14年10月7日から平成14年12月20日まで実施された。

なお、県知事から史跡の現状変更許可申請と文化財保護法第53条の3の規定による発掘通知が提出され、調査に先立ち、法第57条第1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から提出された。

発掘調査届に対する指示通知番号は、次の通りである。

平成14年10月24日付け 教文第2-77号

(文化財保護課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

川越城の発掘調査は、平成14年10月7日から平成14年12月20日の期間で行った。

今回の調査は、川越城跡第20次調査である。

調査は、平成15年10月初旬に事務手続き、事務所設置を行い、重機による表土除去作業を開始した。

10月中旬から基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を12月中旬まで行った。

調査の結果、検出した遺構は、堀跡2条、土塁跡1基、溝跡1条、井戸跡1基、ピット1基であった。すべての調査終了後、重機による埋め戻し作業を行い12月20日に調査を終了した。

### (2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成17年2月24日から平成17年3月31日まで実施した。

1月当初から、遺物の接合・復元を行い、同時に遺構平面・断面図の修正を行い、第2原因の作成を行った。復元の終了した遺物から、実測を開始した。

遺構図面については、デジタルトレースを行った。

遺構・遺物のトレース作業は1月下旬まで行い、版組作業を行った。同時に遺物の写真撮影を行い、写真図版の作成、原稿執筆に取り掛かった。

原稿執筆終了後、編集作業を行い、3月中旬に印刷会社を決定し、入稿した。3回の校正を経て、平成17年3月末に報告書を刊行した。

## 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

### (1) 発掘調査

平成14年度

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大館健
管理部	
管理幹	持山紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(調査第1担当)	辻岡孝志
統括調査員	鈴木孝之
調査員	安生素明

### (2) 整理・報告書作成事業

平成16年度

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村英樹
管理部	
管理部副部長	村田健二
主席	田中由夫
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池久
主事	海老名健
主事	石原良子
調査部	
調査部長	宮崎朝雄
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(資料整理担当)	磯崎一
主任調査員	栗岡潤
調査員	安生素明



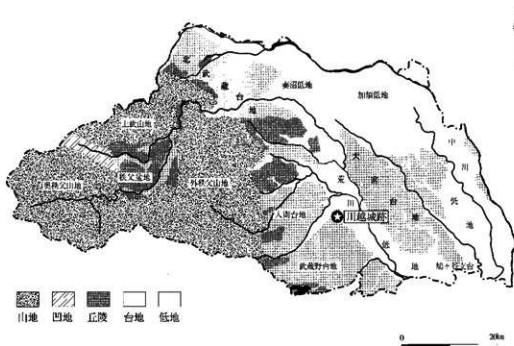
## II 川越城の立地と環境

川越城(1)は東武東上線川越駅の北北東約2kmの地点に当たり、川越市郭町2-6番地他に所在する。

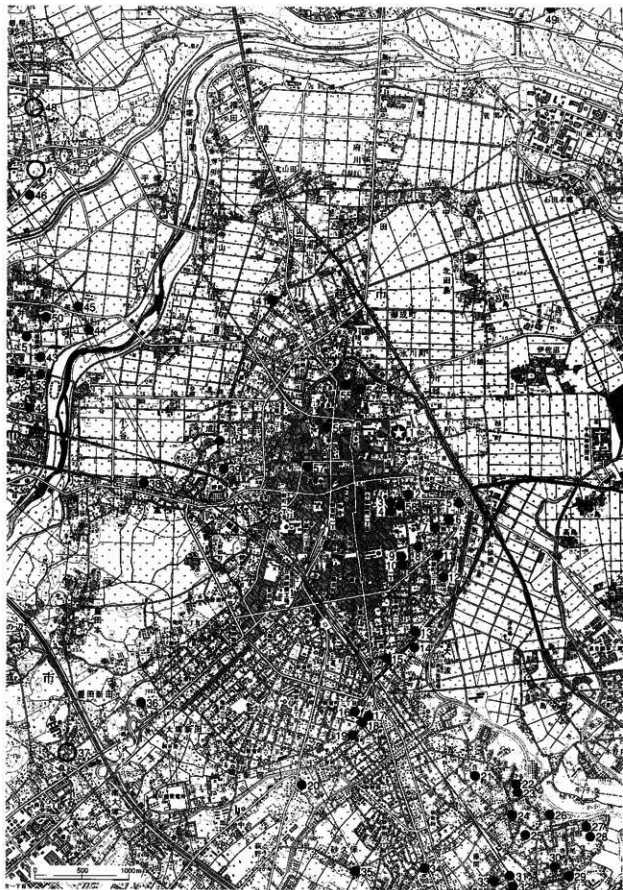
川越市は、埼玉県では中央やや南寄りに位置し、地理的には武蔵野台地北縁にあたる川越台地と、秩父山地から連なる入間台地、入間川によって形成される沖積地からなる。台地縁辺部は北に突出し、周囲には新河岸川が流れる。川越城は、この北に突出した武蔵野台地北東端、先端部東側の仙波台地と呼ばれる地点に位置する。

入間川の支流である新河岸川は、川越城を要害の地とする重要な要素であるが、これら川越市を取り巻く河川は埼玉県西北部の山岳地帯を源流としている。埼玉県の地形は、秩父山地に代表される山地が西部に集中し、山地に端を発する河川が東流して次第に荒川と合流する。荒川と合流してからは南流を開始し、埼玉県の東側は全体的に低地形が形成されている。北に突出する台地を迂回する新河岸川は近

代に至って河川改修の結果、現在の姿になったものである。江戸時代まで、本来の新河岸川は川越市仙波町滝ノ下周辺を水源とする河川であったが、寛永十五年(1638)の川越城焼失後、復興資材運搬の目的で川越城南側を流れていた遊女川と結ばれる。遊女川は城南側の低地帯を流れていた河川で、「七つ釜」と呼ばれる湧水池を持つことで知られる。遊女川も、自然地形ながら川越城の外堀的な役割を担っていたと考えられており、新河岸川と連結することで資材運搬用の可航川としての役割が確立された。新河岸川は近代に赤間川と連結される。赤間川は武蔵野台地に沿って仙波台地を迂回し、伊佐沼に流入していた河川である。川越城は、新河岸川や遊女川などの河川・低地に囲まれ、その外側には入間川・荒川といった河川に周囲を守られた天然の要害であった。中世から江戸の北の守りとして重要な役割を担い、栄えてきたのである。



第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

市町村	番号	遺跡名	時代
川越市	1	川越城	
	2	多宝塔古墳	古墳
	3	慈眼堂古墳	古墳
	4	小仙波堀ノ内	中世
	5	小仙波貝塚	縄文
	6	小仙波4丁目遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
	7	三変稲荷神社古墳	古墳
	8	弁天西遺跡	古墳・奈良・平安・中世
	9	仙波古代集落遺跡	古墳・奈良・平安
	10	彈正屋敷	中世
	11	弁天南遺跡	縄文・古墳・中世
	12	仙波氏館	中世
	13	水川神社古墳	古墳
	14	愛宕神社古墳	古墳
	15	浅間神社古墳	古墳
	16	熊野神社西遺跡	古墳・奈良・平安
	17	岸町1～4号横穴墓	古墳
	18	岸町の横穴	古墳
	19	岸町山下の横穴	古墳
	20	八雲神社古墳	古墳
	21	漆谷遺跡	奈良・平安
	22	寺尾城	中世
	23	寺尾庵寺	縄文・平安
	24	河岸原遺跡	縄文・平安
	25	原遺跡	縄文
	26	河岸遺跡	縄文・平安・近世
	27	寺尾貝塚	縄文・奈良・平安
	28	後原寺側遺跡	縄文・奈良・平安
	29	多成遺跡	縄文・平安・中世

市町村	番号	遺跡名	時代
	30	中原遺跡	縄文・古墳
	31	藤原町遺跡	縄文
	32	稲荷町遺跡	縄文
	33	藤原町西遺跡	縄文・奈良・平安
	34	吉田神社古墳	古墳
	35	砂久保遺跡	中世
	36	山王塚古墳	古墳
	37	南大塚古墳群	古墳
	38	水野屋敷	近世
	39	月吉屋敷	中世
	40	今成屋敷	中世
	41	南山田遺跡	弥生・古墳
	42	薮ヶ岡遺跡	弥生・古墳
	43	河越氏館	中世
	44	浅間下遺跡	古墳・平安
	45	会下遺跡	古墳・中世
	46	登戸遺跡	弥生・古墳
坂戸市	47	下小坂古墳群	古墳
	48	天王山古墳群	古墳
川島町	49	浅間塚古墳	古墳
川越市	50	花見堂遺跡	縄文・平安・中世・近世
	51	龍光遺跡	奈良・中世
	52	山上久保遺跡	古墳・奈良・中世
	53	天王遺跡	奈良・平安・中世
	54	宮下町2丁目遺跡	中世・近世
	55	東明寺南遺跡	中世・近世
	56	元町2丁目遺跡	古墳・中世・近世・近代
	57	仲町遺跡	奈良・平安・中世・近世
	58	喜多院境内遺跡	近世

川越城の位置する台地周辺には、豊かな環境的要因からか多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代については未だ遺跡は確認されていないが、遺物はこれまでもわずかに確認されている。

縄文時代の遺跡は、台地の東側縁辺部を中心に分布している。早期から前期にかけては小仙波貝塚(5)や寺尾貝塚(27)などが知られるが、小仙波4丁目遺跡(6)、弁天南遺跡(11)、河岸原遺跡(24)、原遺跡(25)、河岸遺跡(26)、後原寺側遺跡(28)といった早期末・前期から後期にかけての遺跡が、多く分布する。

弥生時代については、市内各所から土器の断片が出土し、住居跡が散見されているようだが、薮ヶ岡遺跡(42)で見つかった後期の集落跡のようにまと

まった報告は数少ない。

古墳時代については、多宝塔古墳(2)、慈眼堂古墳(3)、小仙波4丁目遺跡、三変稲荷神社古墳(7)、水川神社古墳(13)、愛宕神社古墳(14)、浅間神社古墳(15)、八雲神社古墳(20)、吉田神社古墳(34)、山王塚古墳(36)、南大塚古墳群(37)などの古墳が存在する。全体的に、縄文時代の遺跡と同様台地の縁辺部に築かれている例が多く、東側に集中する傾向が見られる。中でも南大塚古墳群は10基以上の群を形成しており、円筒埴輪、人物・馬形埴輪や、近年では埴輪棺などの良好な資料が発見されている。また、岸町横穴群(18)・(19)などの横穴墓も存在し、アーチ型の横穴墓3基から成人男女の骨が計7対発見されている。古墳以外にも、

集落跡として小仙波4丁目遺跡、弁天西遺跡(8)、仙波古代集落遺跡(9)、熊野神社西遺跡(16)、中原遺跡(30)、山王久保遺跡(52)などが存在する。

奈良時代・平安時代になると、小仙波4丁目遺跡や弁天西遺跡、仙波古代集落跡など集落跡の発見が目立ってくる。古墳時代から古代にかけて、次第に活発化してゆく川越周辺は、中世に至る頃には歴史的にも重要な位置を占めていくようになる。

古代末から中世にかけて、埼玉県にあたる地域で「武蔵七党」などの武士団が、新興勢力として活躍するようになる。律令制による中央集権体制が崩壊していく中、各地で争乱が相次ぐようになる。争乱の討伐や源平合戦など、数々の歴史的動乱を経ながら、関東における武士は、着実に歴史の表舞台に立つようになっていた。

川越に最も縁のある一族に、河越氏があげられる。平安末期に源頼朝が挙兵、平氏政権を打倒し関東に武家政権を樹立した当初から、河越氏は源氏に従って活躍した。河越氏に関わる遺跡としては、河越氏館(43)の存在がある。河越氏館は、入間川を挟んで川越城とは対岸の上戸地区にあったと考えられており、国指定史跡となっている。周辺には中世居館跡が多く、中世前半当時の繁栄が想起される。

中世も室町時代後半に差し掛かると、川越周辺にも争乱の色が濃くなる。室町幕府と鎌倉府の対立に端を発した争いは、上杉氏の内部抗争や関東管領と鎌倉府の対立などに至り、関東における争乱は激化の一途を辿る。こうした世情の中で、川越城は誕生することになる。関東管領と対立を続けていた鎌倉公方の足利持氏は永享十年(1438)に上杉憲実討伐された。その後、持氏の子である足利成氏は享徳三年(1454)に鎌倉公方となるが、関東管領の上杉憲忠を殺害する。これにより翌年には今川氏に成氏討伐の幕命が下り、成氏は今川氏に攻められた挙句に古河まで落ち延びることになる。結局、成氏は古河を本拠地とし、初代の古河公方として勢力を拡大していった。

長らく鎌倉公方と対立関係にあった上杉氏は、古河公方の勢力拡大によって再び脅威にさらされることになった。ここに来て、初めて歴史上に川越城が登場する。関東管領上杉持朝は古河公方に備えるため、長祿元年(1457)、家臣である太田道真・道灌父子に築城を命じた。こうして築かれたのが川越城である。古河公方と上杉氏は各地で戦いを繰り返したが、次第に上杉氏の内部で、山内上杉と扇谷上杉の対立が深刻化していく。川越城の生みの親である太田道灌も両上杉の対立の中で謀殺され、関東の情勢はさらに混迷を深めていく。明応四年(1495)、関東に進出してきた北条早雲は扇谷上杉の小田原城に攻め込み、上杉氏の領有する城は次々に後北条氏に攻略されていった。堅牢を誇る川越城も天文六年に落城し、城主上杉朝定も松山城まで落ち逃れた。

文明十四年(1545)、川越城の奪回を図り、上杉朝定・憲政と同盟を結んだ古河公方、足利晴氏の連合軍が川越城を包囲する。兵力的には、上杉・足利連合軍が圧倒的に優位に立っていたと言われる。しかし、当時城を守っていた福島綱成は、援軍に駆けつけた北条氏康とともに上杉・古河公方連合軍に夜襲をかけ、見事に敗走させる。後に「河越夜戦」と呼ばれる戦いはこうして後北条氏の勝利で決着し、後に軍記物などにまで語られている。

河越夜戦以降、後北条氏による川越の支配が決定的となり、天正十八年(1590)の豊臣秀吉による北条攻めによって滅亡するまで、後北条氏によって治められた。豊臣秀吉は全国統一を目指すため、小田原城攻略を先駆けに関東進出を実行に移す。岩付城、鉢形城、忍城などの諸城が陥落し、川越も前田利家の軍勢に囲まれ、結果無血開城となった。この後、徳川家康の関東入りに伴い、徳川家臣の酒井重忠が一万石で川越城主となる。以後は酒井氏の他に堀田氏、松平氏、柳沢氏、秋元氏といった徳川家の重臣が川越を治めることになる。川越は交通の要所でもあり、川越藩は徳川幕府においても重要な位置付けがなされていたと考えられる。

### Ⅲ 遺跡の概要

今回の川越城の発掘調査は、平成15年10月7日から平成15年12月20日にかけて、700mについて行った。調査対象区は、改修工事を要する校舎部分のみであり、東西約70m、南北約10mの長方形を呈する。校舎の基礎工事・撤去工事により、遺構が相当の攪乱を受けていることが予想されていた。川越城に関する発掘調査は、これまでに川越市教育委員会・川越市立博物館・川越市遺跡調査会・埼埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われている。発掘調査成果として報告されているのは、

埼玉県・埼埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001

「川越城/小在家Ⅱ」

川越市立博物館 2000

「川越城跡の丸跡発掘調査報告書」

川越市遺跡調査会 2003「川越城跡 第11次調査」

川越市教育委員会・川越市遺跡調査会 2003

「川越城跡（第15次発掘調査報告）」

川越市立博物館 2004

「川越城跡第4次調査 発掘調査報告」

である。今回の調査は第20次調査に当たり、埼埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査では2回目となる。

1回目の調査は、平成9年度から10年度にかけて、都合3回に分けて行われた。調査地点は今回の調査区とは校舎を挟んで南側で向き合う位置にあり、多くの遺構・遺物が検出されている。

表土掘削の結果、表土に近い箇所では校舎基礎による大規模な攪乱が認められた。調査区東半部では全体的に攪乱の影響が強く、遺構確認作業を行ったがまったく確認できない状況であった。このため、全体図では遺構確認が可能であった西半部について掲載している。これに対し調査区西半分では大規模な溝状の遺構が確認され、溝状遺構の東岸には小礫の混じる硬化した箇所も確認された。西半部で確認された溝状の遺構は東西幅約20m、南北方向に延びていた。この大規模な溝状遺構に並行するかたちで、

東西幅約1mの溝状遺構も確認された。

調査が進むにつれ、検出された遺構は堀跡が2条、堀の東側に約2mの間隔を空けて溝跡が1条、土塁跡1基、堀跡内から井戸が1基、ピットが1基である。

最初に確認された東西幅約20mの堀跡は、土層観察の結果、東側から土が流れ込んでいる様子が明瞭に確認できた。また、堀東側に築かれた土塁を構築する土・礫が大量に混入することから、土塁を崩して堀を埋め立てたものと思われる。ただし、土塁を構築していた白色粘土や礫、ロームブロックは堀跡底部に近づくと見られなくなり、底部に近い土層は堆積の状況からも自然堆積の可能性が高い。堀跡の遺物は、上層部の埋め立てと思われる土層内からも出土してはいるが数は少ない。遺物の大半は底部周辺の自然堆積と思われる層から出土している。遺物の種類は多岐にわたり、殆どが9世紀代のものと思われる。瓦も多く出土しており、丸瓦、塀瓦を主体とするが、第9次・第12次調査では出土していない棧瓦の出土が特徴的である。

土塁の基部は、検出された堀跡に近い深さにまで達しており、試掘坑を入れた結果、土塁の下からも堀跡1条が検出された。土塁跡周辺からの出土遺物は殆ど見られなかったが、土塁を掘削し土塁下の堀跡を調査する際、堀跡底部に近い黒色土層中から若干出土している。出土遺物は17世紀のものが中心となり、中世に築かれた堀をある時期に改修したと推定される。近世における川越城の改修で堀を拡大するほど大規模なものといえば、当時の城主であった松平信綱による、寛永十六年(1639)の改修が想定される。

井戸跡は近世堀の西側立ち上がりには検出された。表土に近い部分は攪乱の影響で不明瞭である。井戸跡の時期は、出土遺物も少なく堀の改修との前後関係は不明である。また、近世堀の西側立ち上がりは直線的ではなく、テラス状の段が形成されるが段に当たる箇所から、ピットが1基検出された。性格は不明だが、堀に伴う何らかの施設跡の可能性は否定できない。

### Ⅲ 遺跡の概要

今回の川越城の発掘調査は、平成15年10月7日から平成15年12月20日にかけて、700mについて行った。調査対象区は、改修工事を要する校舎部分のみであり、東西約70m、南北約10mの長方形を呈する。校舎の基礎工事・撤去工事により、遺構が相当の攪乱を受けていることが予想されていた。川越城に関する発掘調査は、これまでに川越市教育委員会・川越市立博物館・川越市遺跡調査会・財埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われている。発掘調査成果として報告されているのは、

埼玉県・財埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001

「川越城/小在家Ⅱ」

川越市立博物館 2000

「川越城跡の丸跡発掘調査報告書」

川越市遺跡調査会 2003「川越城跡 第11次調査」

川越市教育委員会・川越市遺跡調査会 2003

「川越城跡(第15次発掘調査報告)」

川越市立博物館 2004

「川越城跡第4次調査 発掘調査報告」

である。今回の調査は第20次調査に当たり、財埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査では2回目となる。

1回目の調査は、平成9年度から10年度にかけて、都合3回に分けて行われた。調査地点は今回の調査区とは校舎を挟んで南側で向き合う位置にあり、多くの遺構・遺物が検出されている。

表土掘削の結果、表土に近い箇所では校舎基礎による大規模な攪乱が認められた。調査区東半部では全体的に攪乱の影響が強く、遺構確認作業を行ったがまったく確認できない状況であった。このため、全体図では遺構確認が可能であった西半部について掲載している。これに対し調査区西半分では大規模な溝状の遺構が確認され、溝状遺構の東岸には小礫の混じる硬化した箇所も確認された。西半部で確認された溝状の遺構は東西幅約20m、南北方向に延びていた。この大規模な溝状遺構に並行するかたちで、

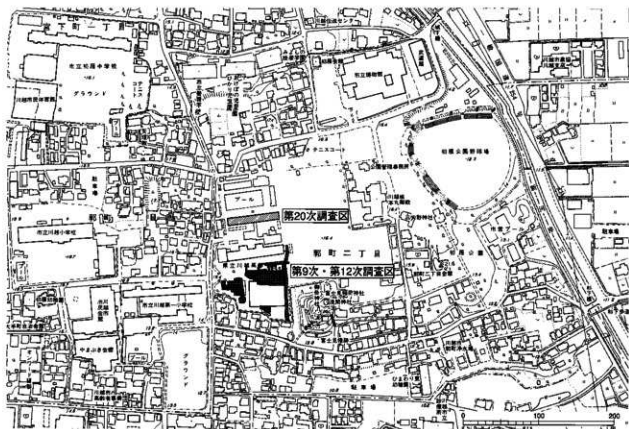
東西幅約1mの溝状遺構も確認された。

調査が進むにつれ、検出された遺構は堀跡が2条、堀の東側に約2mの間隔を空けて溝跡が1条、土塁跡1基、堀跡内から井戸が1基、ピットが1基である。

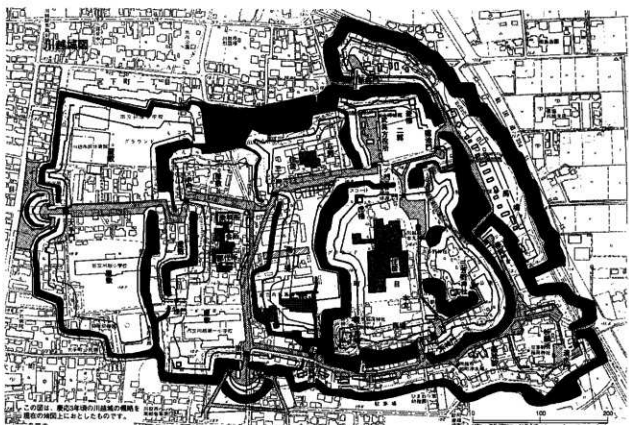
最初に確認された東西幅約20mの堀跡は、土層観察の結果、東側から土が流れ込んでいる様子が明瞭に確認できた。また、堀東側に築かれた土塁を構築する土・礫が大量に混入することから、土塁を崩して堀を埋め立てたものと思われる。ただし、土塁を構築していた白色粘土や礫、ロームブロックは堀跡底部に近づくと見られなくなり、底部に近い土層は堆積の状況からも自然堆積の可能性が高い。堀跡の遺物は、上層部の埋め立てと思われる土層内からも出土してはいるが数は少ない。遺物の大半は底部周辺の自然堆積と思われる層から出土している。遺物の種類は多岐にわたり、殆どが9世紀代のもと思われる。瓦も多く出土しており、丸瓦、塀瓦を主体とするが、第9次・第12次調査では出土していない椀瓦の出土が特徴的である。

土塁の基部は、検出された堀跡に近い深さにまで達しており、試掘坑を入れた結果、土塁の下からも堀跡1条が検出された。土塁跡周辺からの出土遺物は殆ど見られなかったが、土塁を掘削し土塁下の堀跡を調査する際、堀跡底部に近い黒色土層中から若干出土している。出土遺物は17世紀のものが中心となり、中世に築かれた堀をある時期に改修したと推定される。近世における川越城の改修で堀を拡大するほど大規模なものといえば、当時の城主であった松平信綱による、寛永十六年(1639)の改修が想定される。

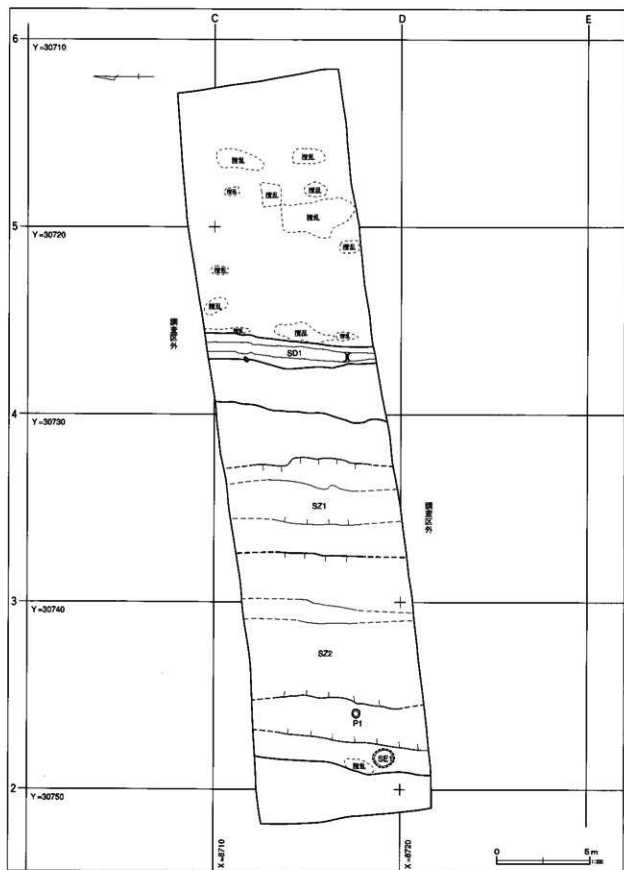
井戸跡は近世堀の西側立ち上がり検出された。表土に近い部分は攪乱の影響で不明瞭である。井戸跡の時期は、出土遺物も少なく堀の改修との前後関係は不明である。また、近世堀の西側立ち上がりは直線的ではなく、テラス状の段が形成されるが段に当たる箇所から、ピットが1基検出された。性格は不明だが、堀に伴う何らかの施設跡の可能性は否定できない。



第3図 遺跡周辺の地形と調査地点



第4図 地形図と古地図の合成図 (川越市博1992より転載・加筆)



第5図 川越城跡調査区全体図



## IV 発見された遺構と遺物

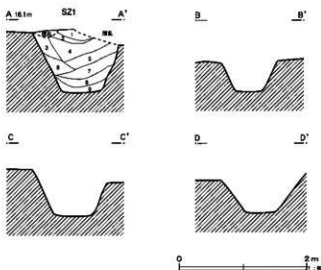
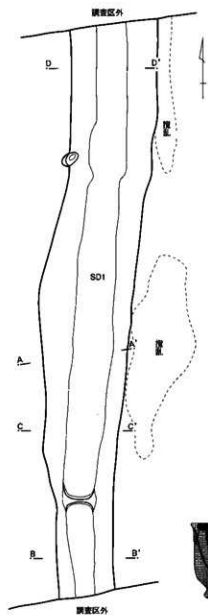
### (1) 溝跡

#### 第1号溝跡

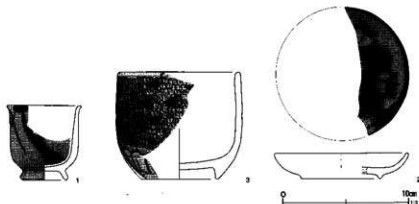
発見された溝跡はC-4グリッドを南北に横切るかたちで検出された。幅0.9m～1.38m、深さ0.48m～1.02mを測る。部分的に校舎の基礎工事による攪乱の影響を受けていた。

第1号溝跡の断面形は箱型を呈し、調査区南端より

り約1m、北端より約6mの地点に小さな土橋状に掘り残した箇所が検出されたが機能は不明。遺物は覆土上層より、近世以降の遺物が出土しているが、攪乱の影響もあり遺構に伴う遺物はほとんど見られない。堀に伴う施設と思われるが、中世の段階か近世に築かれたのかは判断が難しい。



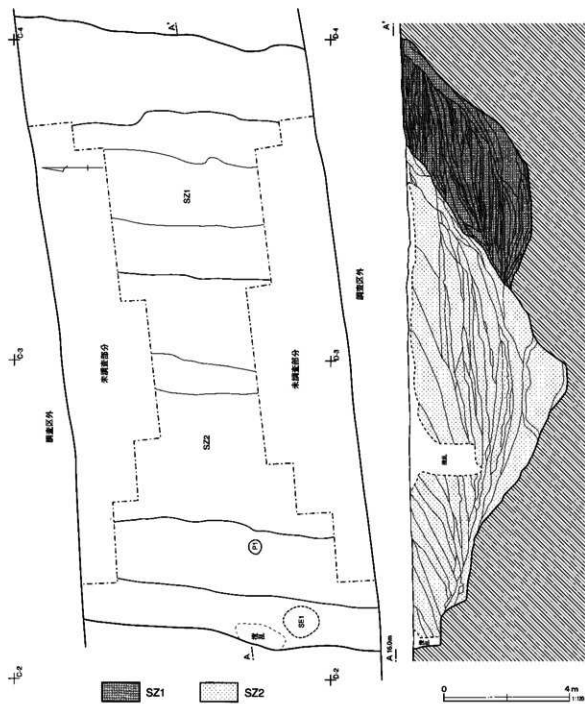
- 第1号溝跡
- |        |                                    |
|--------|------------------------------------|
| 1 褐色土  | ロームブロック。攪乱の影響                      |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック。白色粘土ブロック少量                 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック少量。白色粘土ブロック。焼土ブロック微量        |
| 4 褐色土  | ロームブロック多量。白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物微量。炭分 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック多量。焼土ブロック、炭化物微量             |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック多量。炭化物微量                    |
| 7 褐色土  | ロームブロック多量。焼土ブロック、炭化物微量             |
| 8 明褐色土 | 粒子の大きなロームブロック主体                    |
| 9 黒褐色土 | ロームブロック多量                          |



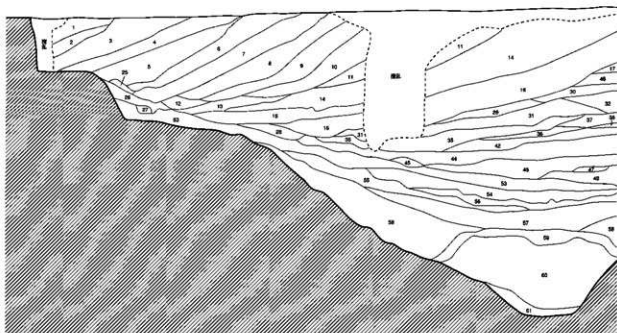
第6図 第1号溝跡・第1号溝跡出土遺物

第2表 第1号溝跡出土遺物觀察表

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
6	1	磁器	小碗	(6.0)	6.0	3.9		筒形	草	
	2	磁器	小皿	(10.9)	2.1	(6.5)		丸形底中		药器版
	3	磁器	小碗	(9.9)	8.7	6.2				药器版

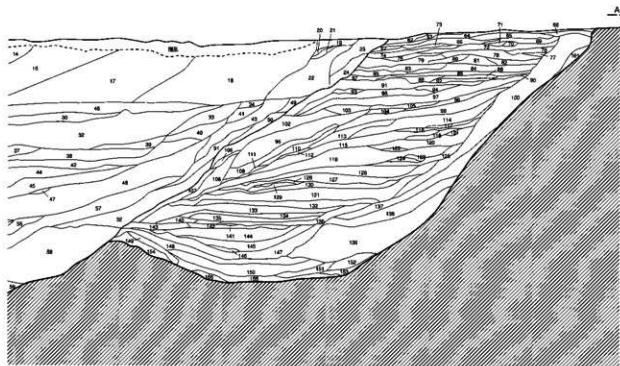


第7図 第1号堀跡・第2号堀跡・第1号土壇跡



第2号垣跡			
1 暗褐色土	全体にロームブロック多量、白色粘土ブロック少量	43 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック微量、小礫
2 暗褐色土	ロームブロック層よりも密度が高い		近世以降の侵襲部の自然堆積土
	白色粘土ブロック、小礫少量	44 暗褐色土	粒子の大きな白色粘土ブロック主体
3 暗褐色土	ローム粒子主体、白色粘土ブロック、小礫少量	45 明褐色土	ロームブロック、小礫多量
4 暗褐色土	ローム粒子主体、白色粘土ブロック、小礫少量	46 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫
5 暗褐色土	白色粘土ブロック多量、ロームブロック	47 暗褐色土	ロームブロック、小礫少量
6 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫	48 暗褐色土	ロームブロック微量、白色粘土ブロック少量、自然堆積土
7 明褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量、小礫	49 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック、自然堆積土
8 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫	50 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック微量、自然堆積土
9 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック、小礫少量	51 暗褐色土	ロームブロック多量、小礫、自然堆積土
10 明褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック多量、小礫	52 暗褐色土	ロームブロック少量、自然堆積土
11 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫	53 暗褐色土	ソフトローム主体、ハードロームブロック少量、自然堆積土
12 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック微量	54 暗褐色土	ソフトローム主体、ソフトロームブロック少量、自然堆積土
13 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫	55 暗褐色土	ソフトローム多量、ハードロームブロック微量、自然堆積土
14 暗褐色土	ロームブロック、小礫多量、白色粘土ブロック	56 暗褐色土	ロームブロック、黄土ブロック微量、自然堆積土
15 明褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫多量、黄土ブロック	57 暗褐色土	ロームブロック、小礫、炭化物微量、自然堆積土
16 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック微量、小礫多量	58 暗褐色土	土層浸透に小礫が多数、自然堆積土
17 黄褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック多量	59 暗褐色土	ロームブロック、粘土多量、自然堆積土
	炭化物、焼土ブロック微量、小礫多量	60 暗褐色土	粘性強く、鉄分多量、自然堆積土
18 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、炭化物微量、小礫多量	61 黄褐色土	粘性が高い、土層浸透に小礫多量、自然堆積土
19 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、炭化物微量		
20 暗褐色土	白色粘土ブロック主体、炭化物微量	第1号垣跡	
21 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック、小礫少量、炭化物	62 暗褐色土	白色粘土ブロック、小礫主体、ロームブロック微量
22 暗褐色土	ロームブロック少量、白色粘土ブロック、炭化物少量	63 暗褐色土	白色粘土ブロック、小礫主体
23 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック微量、小礫	64 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、全体的に小礫多量
24 暗褐色土	ロームブロック微量、白色粘土ブロック、小礫少量	65 灰白色土	白色粘土ブロック主体、小礫多量、ロームブロック少量
25 明褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック微量	66 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫少量、鉄分
26 暗褐色土	ロームブロック主体	67 暗褐色土	白色粘土ブロック、ロームブロック、小礫少量、鉄分
27 暗褐色土	ロームブロック	68 暗褐色土	ロームブロック主体
28 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、炭化物少量	69 灰白色土	白色粘土ブロック主体、ロームブロック少量、鉄分
29 暗褐色土	ロームブロック少量、白色粘土ブロック		炭化物微量
30 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック	70 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック
31 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫多量	71 暗褐色土	白色粘土ブロック少量、ロームブロック、炭化物微量
32 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫	72 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫、炭化物微量
33 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫	73 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量
34 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック	74 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量
35 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック	75 暗褐色土	白色粘土ブロック、ロームブロック少量、黄土ブロック微量
36 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫多量	76 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土
37 暗褐色土	ロームブロック少量、白色粘土ブロック微量、小礫多量	77 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土、小礫
38 暗褐色土	ロームブロック、小礫多量、白色粘土ブロック	78 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量
39 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック少量、小礫多量	79 暗褐色土	ロームブロック、炭化物微量
40 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫多量		ロームブロック、白色粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
41 暗褐色土	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量、小礫		
42 暗褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫多量		

第8図 第1号垣跡・第2号垣跡・第1号土壘跡土層図(1)



- 80 明褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック
- 81 黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物
- 82 黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック
- 83 明黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック、炭化物微量
- 84 灰褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
- 85 暗褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック多量、炭化物
- 86 黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック少量、焼土ブロック微量、炭化物
- 87 明褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック多量、炭化物
- 88 明褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック少量
- 89 褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック
- 90 褐色土 ロームブロック少量、白色粘土ブロック
- 91 暗褐色土 ロームブロック少量、白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物微量
- 92 黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック
- 93 暗褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック
- 94 暗褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック
- 95 黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック
- 96 明黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土塊、炭化物
- 97 明黄褐色土 ロームブロック
- 98 灰褐色土 ロームブロック少量
- 99 明黄褐色土 ロームブロック多量
- 100 暗褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量、小礫
- 101 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物
- 102 褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック少量、炭化物
- 103 褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック少量
- 104 暗褐色土 ロームブロック少量
- 105 明黄褐色土 ロームブロック
- 106 褐色土 ロームブロック、小礫少量
- 107 暗褐色土 ロームブロック少量
- 108 暗褐色土 ロームブロック
- 109 黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒子
- 110 明褐色土 粒子の小さなロームブロック多量、焼土粒子微量
- 111 明褐色土 ローム粒子多量、炭化物微量
- 112 褐色土 ローム粘土多量、炭化物少量、焼土粘土微量
- 113 明褐色土 ロームブロック、炭化物少量
- 114 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物
- 115 黄褐色土 炭化物、ロームブロック微量
- 116 暗褐色土 ロームブロック多量
- 117 暗褐色土 粒子の小さなロームブロック主部
- 118 明黄褐色土 ロームブロック主部

- 119 明黄褐色土 粒子の大きなロームブロック、白色粘土ブロック、礫、
- 120 明黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫、しまり筋
- 121 黄褐色土 白色粘土ブロック、焼土粒子
- 122 黄褐色土 ロームブロック
- 123 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック
- 124 暗褐色土 ロームブロック少量
- 125 黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック多量、鉄分
- 126 暗褐色土 小礫主部、ロームブロック少量
- 127 明黄褐色土 ロームブロック主部、小礫少量
- 128 黄褐色土 ロームブロック、炭化物微量
- 129 黄褐色土 炭化物微量、小礫
- 130 暗褐色土 ロームブロック少量、白色粘土ブロック
- 131 明黄褐色土 ロームブロック主部、小礫
- 132 暗黄褐色土 ロームブロック多量、白色粘土ブロック
- 133 明黄褐色土 白色粘土ブロック少量
- 134 暗黄褐色土 ロームブロック主部
- 135 明黄褐色土 ロームブロック主部、小礫少量
- 136 暗黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック
- 137 暗褐色土 ロームブロック
- 138 暗褐色土 小礫少量
- 139 暗褐色土 小礫微量
- 140 暗褐色土 ロームブロック少量、小礫、砂利
- 141 暗褐色土 ロームブロック微量、白色粘土ブロック少量
- 142 暗褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック、炭化物
- 143 暗黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫
- 144 灰褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック、小礫
- 145 暗黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロック多量、炭化物、小礫
- 146 明黄褐色土 ロームブロック、炭化物少量
- 147 暗黄褐色土 ロームブロック、焼土ブロック、小礫
- 148 暗黄褐色土 ロームブロック微量、小礫
- 149 褐色土 白色粘土ブロック、砂利
- 150 灰褐色土 白色粘土ブロック、小礫、砂利
- 151 暗褐色土 鉄分多量、砂利主部
- 152 暗褐色土 ロームブロック微量
- 153 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物
- 154 灰白色土 砂質、炭分多量
- 155 灰褐色土 焼土層、鉄分、小礫、炭化物少量
- 156 灰褐色土 粘土質、鉄分

第9図 第1号畑跡・第2号畑跡・第1号土塁跡土層図(2)

## (2) 堀跡・土塁跡

今回の発掘調査で検出された堀跡・土塁跡は調査区の西半分を占め、幅約20m、C-2・C-3グリッドに位置する。当初は堀跡1条・土塁跡1基のみ確認されていたが、土塁跡の下からも堀跡と思われる遺構が検出され、堀の増改築が行われていたことが判明した。そこで古い堀跡を第1号堀跡、第1号堀跡を壊して土塁を築いた新しい堀を第2号堀跡とした。

### 第1号堀跡

東西幅約20mの溝状の遺構が確認された。

第1号堀はC-3グリッドに位置する。西側に検出された第2号堀跡による攪乱のため、正確な規模は不明だが、おそらく上幅は10m前後の規模であったと推測される。下幅は24m、深さは39mを測る。

堀跡底部に近い黒褐色土層中から少量の遺物が出土した。出土遺物は特に炆器類が多く、播鉢8個体、常滑産の大甕の破片、天目茶碗や鉄鉢の施された皿などの陶器、片口鉢と思われる破片や焙烙、板碑の一部などが出土した。

### 第1号土塁

第1号土塁は第2号堀跡に伴う施設であり、川越城の防御施設として第2号堀跡の内側に築かれていたと考えられる。地上に築かれていた土塁の主要部は、川越城の堀を廃棄する際に崩され、埋め立て用土に使用されたと思われる。後述するが、第2号堀跡の土層には、土塁を構成していたと思われる土が堀の内側から大量に流れ込んでいる様子が顕著に観察できた。かろうじて残存していた土塁の基部は、前述したように第1号堀跡を埋め立てるかたちで築かれていた。上幅が3.42m、高さは第1号堀跡の深さと同じ3.9mを測る。土塁全体は白色粘土ブロックとロームブロックを主体として構築されており、大小の礫を混ぜて版築状に突き固められていた。

### 第2号堀跡

第2号堀跡はC-2・C-3グリッドに位置し、上幅19.4m、下幅0.84m、深さは5.64mを測る。

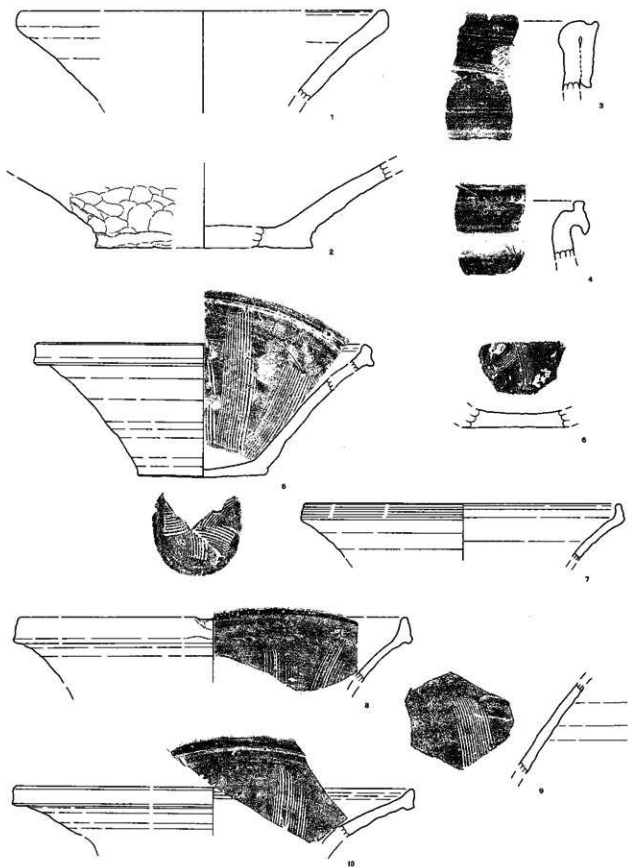
堀跡は、ほぼ正確に南北方向に向かって延びていた。壁断面はおよそ45°の角度で三角形を呈するが、東側の壁が直線的であるのに対し、西側の壁では確認面から約1mと1.7mの地点に2箇所、テラス状の段を形成する。この段が第2号堀跡の当初からの形態であるかは不明であるが、調査区内で確認できる南北9mの範囲では、テラス状の段を確認している。底部は一段低く、壁断面は台形を呈する。

第2号堀跡の土層を観察したところ、確認面より約2.7mまでは西側から流れ込んでいる様子がわかる。しかし、これより下層になるとレンズ状堆積を呈しており、上層で顕著であった、土塁を構築していた白色粘土ブロックとロームブロックの混入が見られなくなる。これらの点から、第2号堀跡の下層は自然堆積であると判断した。また、遺物の大半が底部に近い層より出土している。

### 第1号堀跡・第2号堀跡出土遺物

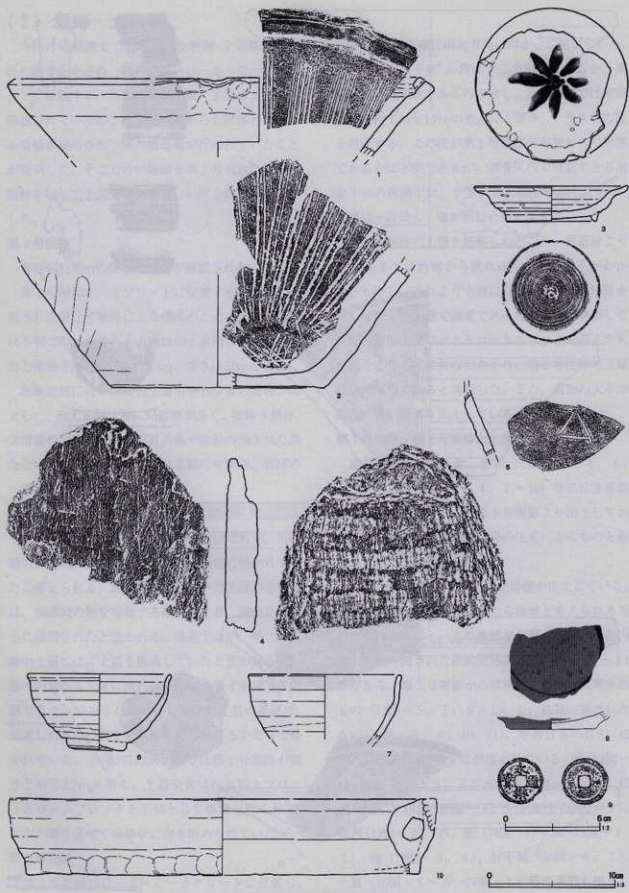
磁器は総じて碗・鉢・德利(13図-1~4、6、10、11、13、14図-3、4、7~10)等の日常雑器が主体を占める。すべて第2号堀跡より出土しており、いずれの遺物も近世以降の生産によるものと思われる。

陶器は最も多く、且つ多様な器種が出土している。第1号堀跡からは近世初頭から前葉と考えられる天目碗(11図-6)と、志野織部産と思われる口縁部内面に緑釉の施された鉄絵見込菊文の皿(11図-3)等がある。第2号堀跡からは灰釉が施された薄手のもの(12図-5、7、8、13)と、鉄釉の施されたもの(12図-3、6、10、11)、容器付きのもの(12図-14~16)、灯明受皿が出土している。碗(12図-18、19、14図-5、6)や皿(12図-4、17、13図-5)片口鉢(18図-1、5)、水注(18図-2)、德利(13図-9、12)、甕(14図-11~13、19図-1、2)、壺(18図-3、4)、行平鍋(18図-6、7)、土瓶(16図-1~4、17図-1)等の茶器も出土している。

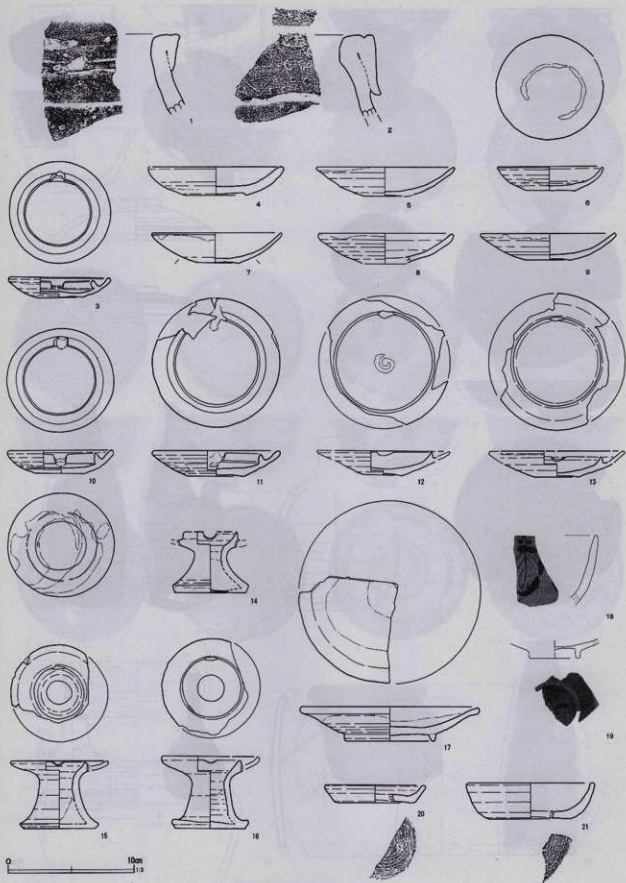


第10图 第1号掘跡出土遺物(1)

0 10cm

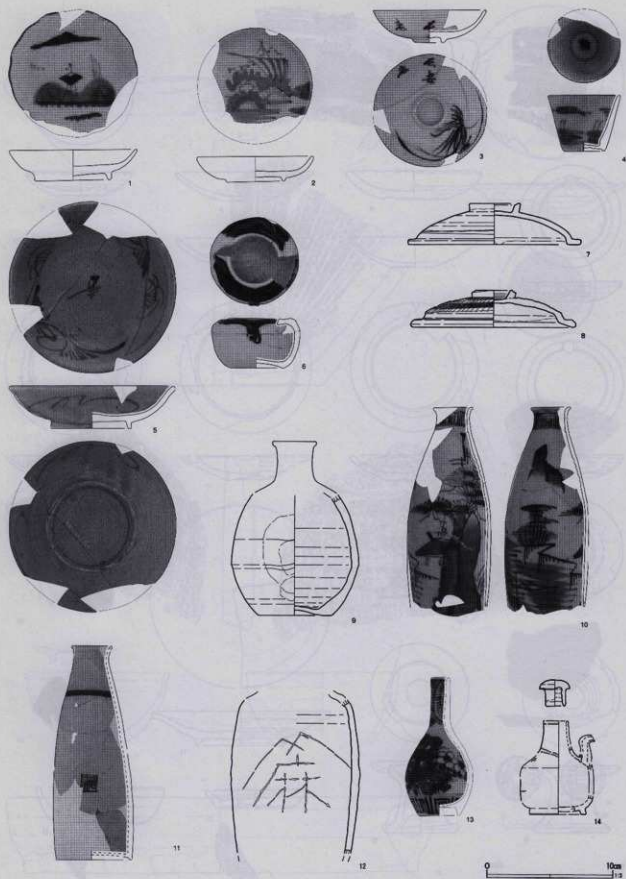


第11图 第1号堀跡出土物(2)

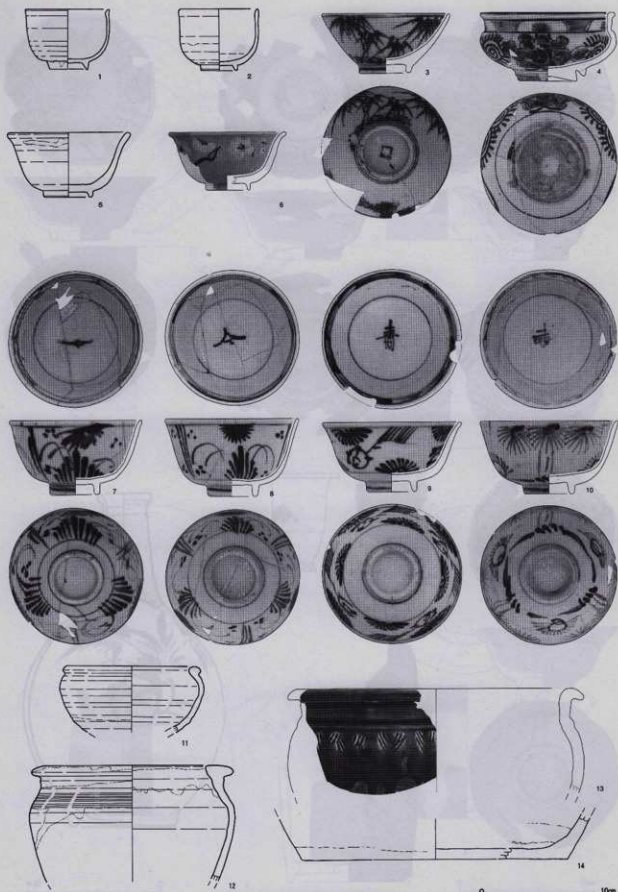


第12图 第2号福跡出土遺物(1)

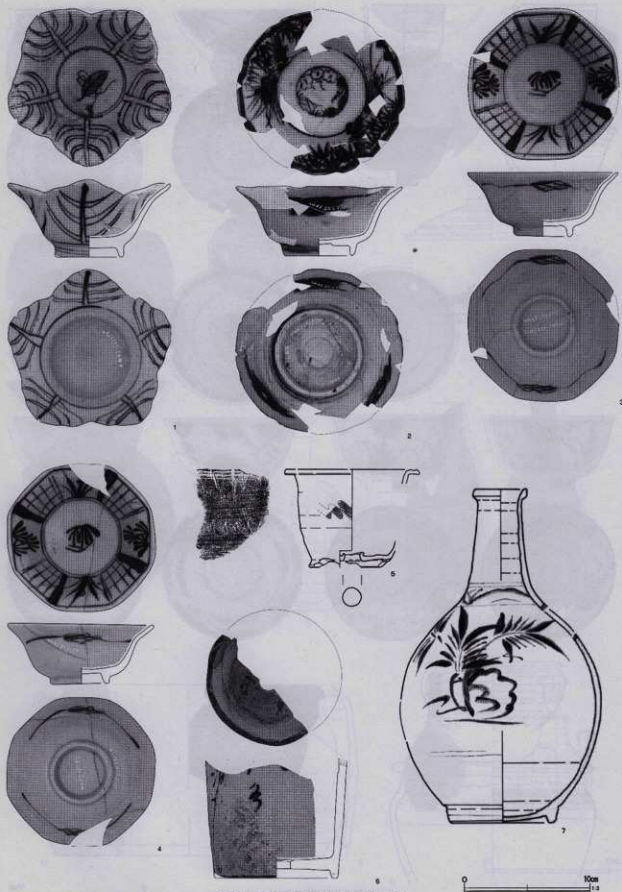




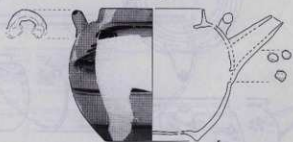
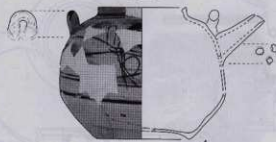
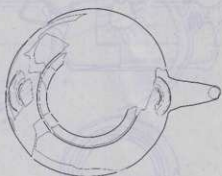
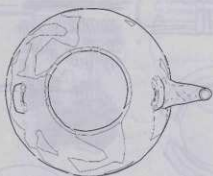
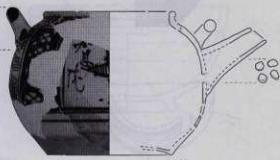
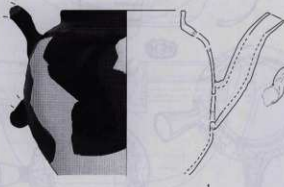
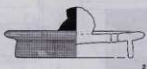
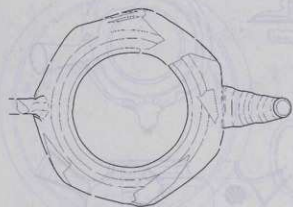
第13图 第2号掘跡出土遺物(2)



第14图 第2号掘跡出土遺物(3)

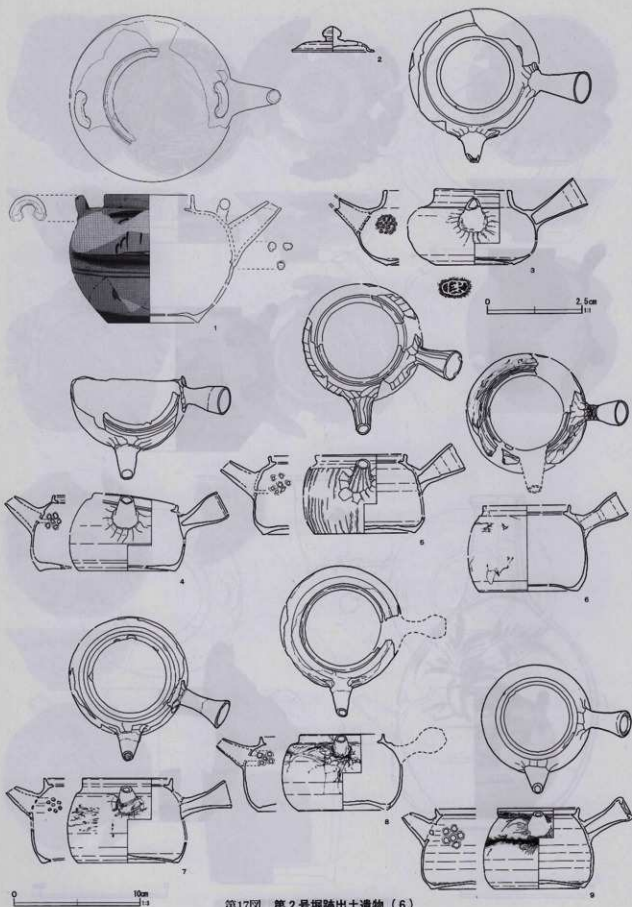


第15图 第2号堀跡出土遺物(4)

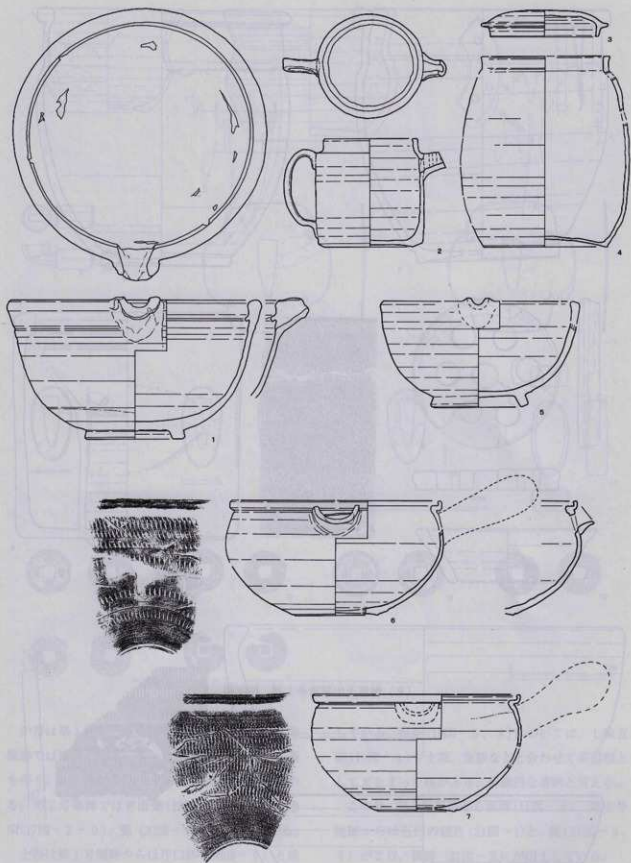


第16图 第2号掘跡出土遺物(5)

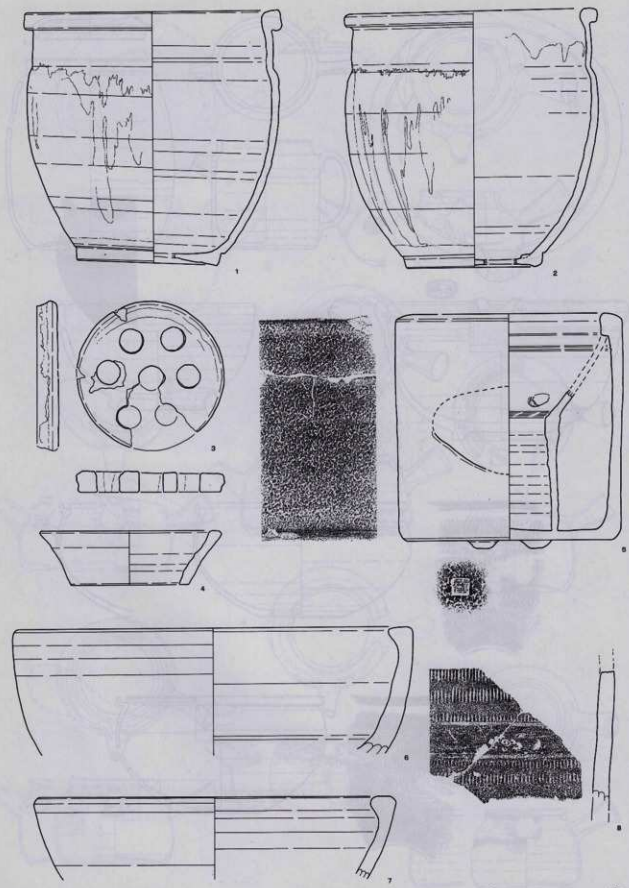




第17图 第2号铜器出土遗物(6)

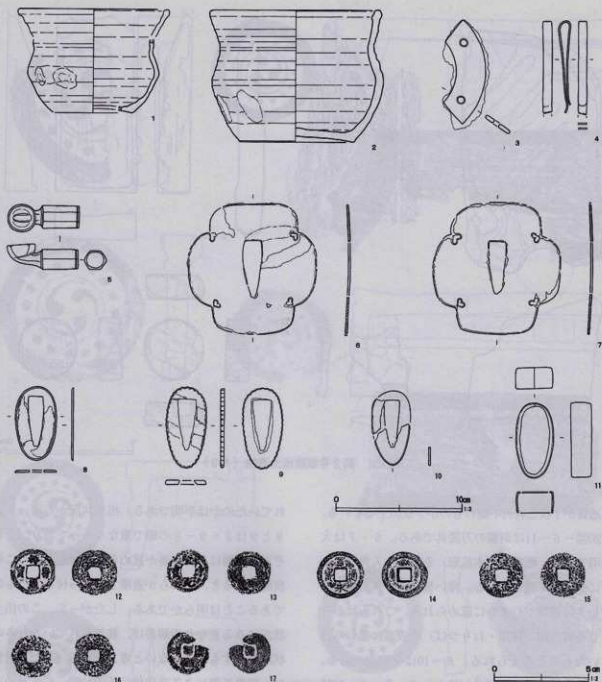


第18图 第2号堀跡出土遺物(7)



第19图 第2号掘跡出土遺物(8)

0 10cm 115



第20図 第2号堀跡出土遺物(9)

炉器は第1号・2号堀跡ともに出土する。第1号堀跡では挿鉢(10図-5~10、11図-1、2)が最も多く、常滑甕(10図-3、4)の破片が出土している。第2号堀跡では常滑甕(12図-1、2)の他、急須(17図-2~9)、甕(20図-1、2)が出土する。

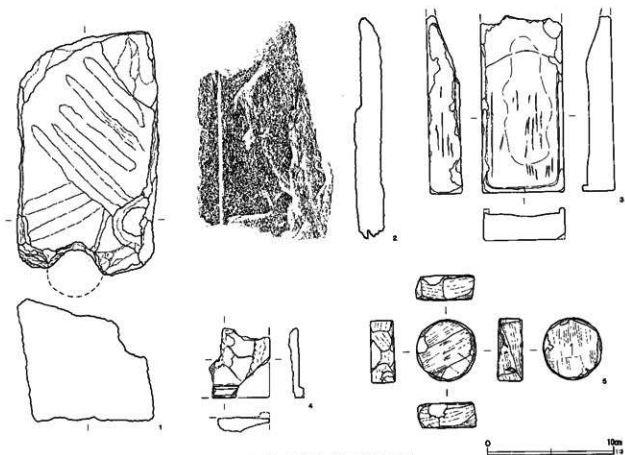
土器は第1号堀跡からは片口鉢(10図-1)と焙烙(11図-9)が、第2号堀跡からは土師質の火鉢破片(19図-6、7)、かわらけ(12図-20、21)が出土

している。焜炉(19図-5、8)については、七輪五徳(19図-4)や土瓶、急須などと合わせて茶器類としてまとまった観があり、特徴的な遺物と言える。

この他、第1号堀跡から板碑(11図-4)、第2号堀跡からは石臼の破片(21図-1)と、硯(21図-3、4)が2点、板碑(21図-2)が出土している。

古銭は第1号堀跡より、永楽通寶1枚、第2号堀跡より祥符通寶・聖宗元寶2枚の北宋銭、その他寛





第21図 第2号塚跡出土遺物(10)

水通寶が1枚と判別不能のものが3枚出土している。

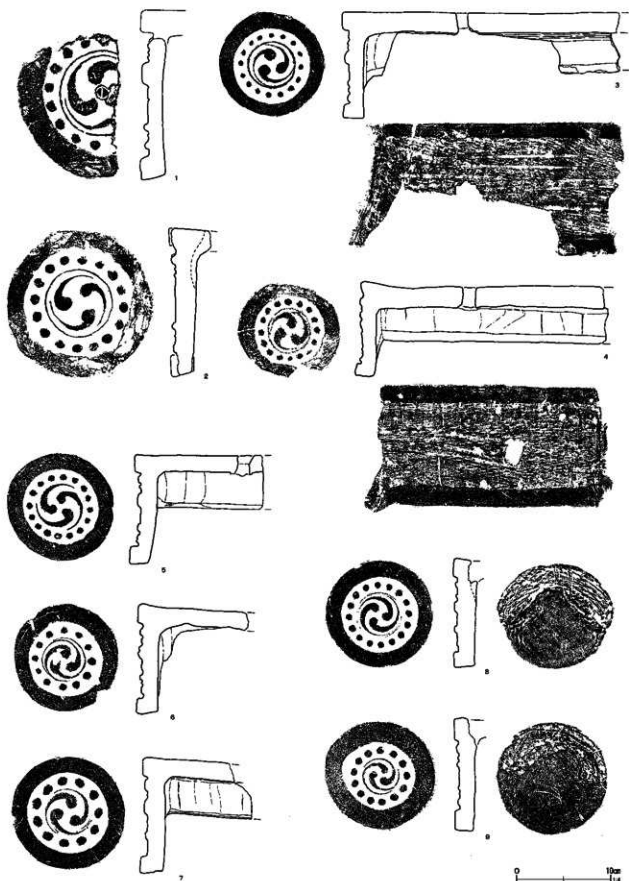
20図・6～11は銅製の刀装具である。6・7は大切羽である。帽額形(木瓜形)を呈し、入角の4ヶ所に猪目透を施している。薄い板状で、表面には漆らしき付着物がわずかに認められる。これらはおそらく革製の鐔(練鐔・ねりつば)の表裏に重ねられていたものと考えられる。8～10は小切羽である。9は菊花様に小さな刻目が施されている。8・10は板状の小切羽で、片面取りを施す。10は全体のおよそ1/3を失っている。8と9の表面にはわずかではあるが金箔が残っている。11は緑金物と考えられる。一方に浅い張り出しを有する薄板を、筒状にして背側で合わせて接合している。

これらの装具はすべて同じ太刀に装着された同一具のものと判断される。小切羽は鞘側と柄側それぞれ3枚ずつ、大切羽に重ねて用いられるものとされるが、実際にこれらの切羽がどのように組み合わせ

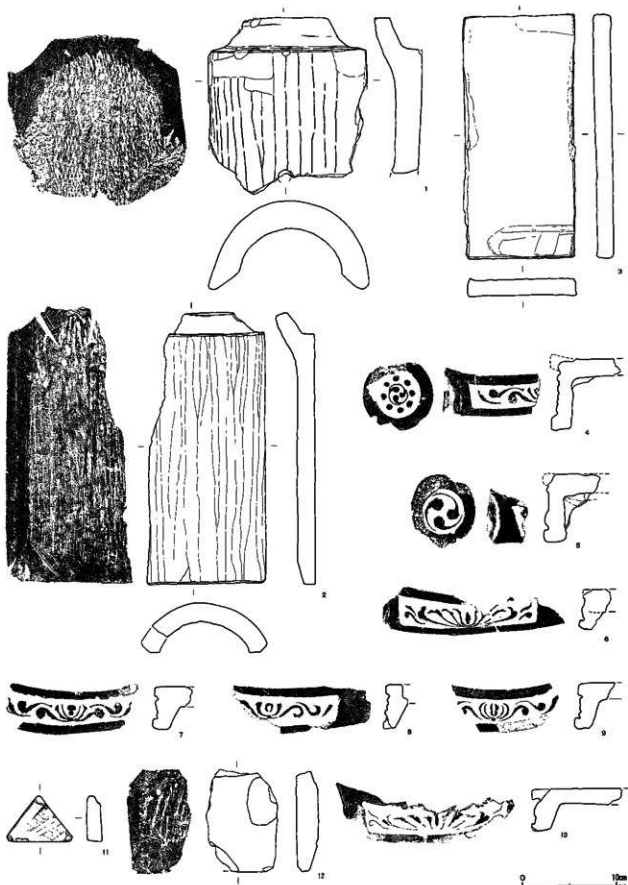
れていたのかは不明である。出土状況からは、7と8と9は7-9-8の順で重なりあっており、それぞれの表面にその痕跡が認められる。しかし、この痕跡をみると、これらが遊離してから附着したものであることは明らかである。したがって、この出土状況にみる重なるの順番は、装着されていたときの状況を示すものではないと考えられる。また、材質は、蛍光X線による非破壊分析の結果、いずれの刀装具も銅が90%以上の数値を示した。不純物の少ない純銅に近いものと判断される。

4は幅のせまい銅の薄板が二つ折れになっているものである。端部には片面取りが施されている。もう一方はやや折れ曲がり欠失している。用途は不明である。分析値は銅が90%以上の数値を示した。

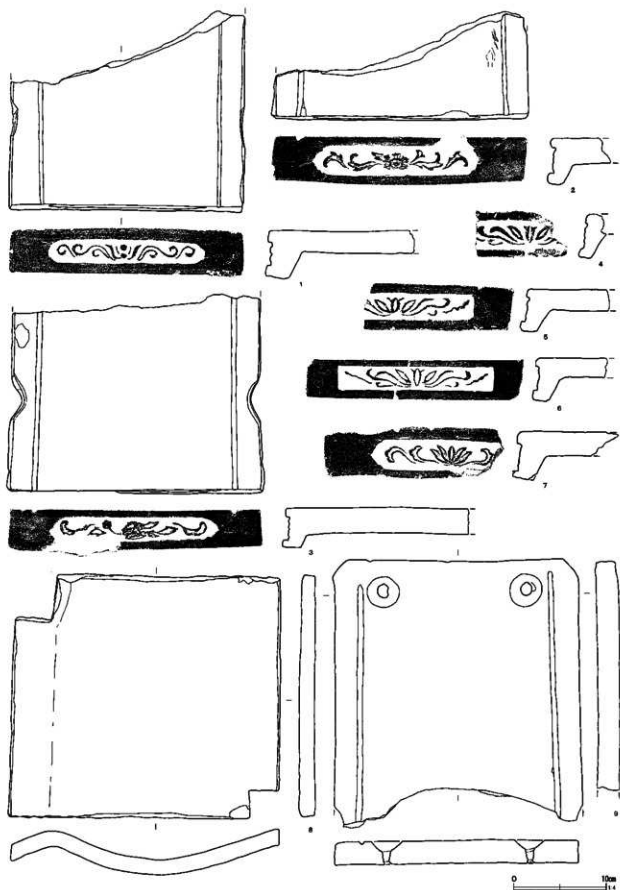
5は煙管の雁首である。内部には竹が残存している。材質は、アルミニウム4.06%・鉄3.64%・銅86.9%・亜鉛2.51%・鉛2.89%という分析結果を得



第22图 第2号窑址出土遗物(11)



第23图 第2号掘跡出土遺物(12)



第24图 第2号遗址出土物(13)

第3表 第1号塚跡出土遺物観察表

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考	
				a	b	c	d				
10	1	土器	鉢	(28.8)	<7.1>					片口鉢か。風化が進む	
	2	炆器	大甕		<6.7>	(17.4)				常滑系	
	3	炆器	大甕					肩張形 口縁外帯		常滑系	
	4	炆器	大甕							常滑系	
	5	炆器	播鉢	26.6	10.55	10.1		肩張形 口縁外帯		底部回転糸切り痕。 表面紫色に発色	
	6	炆器	播鉢							底部に回転糸切り痕。底部 内面見込跡目は三角(推定)	
	7	炆器	播鉢	(25.0)	<4.5>			口縁無装飾			
	8	炆器	播鉢	(30.6)	<5.2>			口縁無装飾			
	9	炆器	播鉢								
	10	炆器	播鉢	(31.4)	<3.8>			口縁外帯 無装飾		表面紫色に発色	
11	1	炆器	播鉢	(33.4)	<6.2>			口縁無装飾			
	2	炆器	播鉢		<9.6>	(16.8)					
	3	陶器	五寸皿	(12.2)	2.8	(7.0)		稜皿形	見込菊花	口縁部内面に緑釉。 見込に鉄絵菊花文	
	4	石	板碑	残存長18.7 幅18.4 厚さ2.3							
	5	炆器	瓶							外面に△の記号を線刻	
	6	陶器	中碗	11.4	6.0	4.7		天目形		外面体部下半~口縁部、内面 全体に鉄釉(天目釉)が輪釉	
	7	陶器	中碗	(12.2)	<5.1>			天目形			
	8	陶器	皿		<1.4>	7.2		平形		透明釉	
	9	土器	始塔	(34.0)	6.0			有耳、浅め			

第4表 第2号塚跡出土遺物観察表

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
12	1	炆器	大甕		<6.3>			肩張形もしくは 寸胴形 口縁外帯		常滑系。外面に自然釉付着
	2	炆器	大甕					肩張形 口縁外帯		常滑系
	3	陶器	灯明受皿	8.2	1.65	3.5	5.3	油溝切立状		内面全体と口縁部外面に鉄 釉。油溝は切口が粗雑で半月 状にしようとして失敗し、切 立状になったものか
	4	陶器	小皿	(10.8)	2.25	(5.0)		平形、クリ底		底部を除く内外面に鉄釉
	5	陶器	灯明皿	11.0	2.3	(3.2)		平形、無高台 見込三足ハ マ跡		内面に灰釉
	6	陶器	灯明皿	8.5	1.9	3.8		平形、無高台 見込環状痕		内面全体と体部に鉄釉
	7	陶器	灯明皿	10.3	2.4	3.3		平形、無高台 見込三足ハ マ跡		内面陶沈痕3ヶ所
	8	陶器	灯明皿	10.8	2.4	3.4		平形、無高台 見込三足ハ マ跡		内面に灰釉
	9	陶器	灯明皿	10.7	2.1	3.5		平形、無高台 見込三足ハ マ跡		内面中央にハマ跡
	10	陶器	灯明受皿	8.5	1.8	3.9	5.7	油溝切立状		鉄釉(錆釉?)底部に 重焼き痕あり
	11	陶器	灯明受皿	10.2	2.0	4.4	6.8	油溝切立状		受け皿に鉄(錆)釉
	12	陶器	灯明受皿	10.4	1.9	3.1	5.6	油溝半月状		
	13	陶器	灯明受皿	10.8	2.0	3.2	7.0	油溝半月状		受け皿(内面)全体に灰釉

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
12	14	陶器	灯明受皿		4.8	5.6	4.0	容器付き 立鼓形		外面に灰軸
	15	陶器	灯明受皿	(7.8)	5.2	5.6	4.4	容器付き 立鼓形		容器内部の下位と底部を除き全体に灰軸
	16	陶器	灯明受皿	(7.8)	5.7	5.6	4.7	容器付き 立鼓形		底部外面と容器内面下位を除き全体に灰軸
	17	陶器	五寸皿	(14.3)	2.7	(7.2)		平形		内面の灰軸を環状に除いている「輪割じ皿」
	18	陶器	小碗						草花文	
	19	陶器	小碗		<1.5>	(4.0)				底部外面、高台内側に「永」の墨書
	20	陶器	かわらけ	(8.0)	1.6	(6.4)				破片
	21	陶器	かわらけ	(10.3)	2.8	(6.4)				破片
13	1	磁器	小皿	10.4	2.6	6.2		丸形底中 輪花	塔、山	
	2	磁器	小皿	(9.4)	2.1	4.8		丸形、底中	松島、帆船、鳥	高台接地面以外は全体に施釉。各所に気泡痕が見られる。
	3	磁器	小皿	9.1	2.6	2.5		丸形	菖蒲、文字	底部外面の文字は「長」「安」と不明一字
	4	磁器	猪口	5.9	4.5	3.4		桶形 蛇の目凹形高台	木蓮、松、草履、蘭木	底部以外施釉
	5	陶器	五寸皿	13.4	3.4	6.4		端反形	草花、見込舟	瀬戸・美濃系。呉須絵、透明釉
	6	磁器	水滴	7.6	4.2	4.5		丸形	葉	内面底部ヘラによるナアの痕、放射状に4単位あり。内面体認もヘラによるナア明瞭
	7	陶器	土鍋蓋	(13.8)	3.2	(4.1)				内面緑色釉を施釉
	8	陶器	土鍋蓋	(13.0)	2.9	3.4	(10.4)			内面緑色釉を施釉
	9	陶器	中瓶(徳利)		<9.6>	5.8		ペコかん形 肩張		瀬戸・美濃系。底面を広く外面全体に施釉。肩張ついたと思われる数箇所がナアが見られ、その内2ヶ所は施釉を付しておいている
	10	磁器	燗徳利	3.2	<15.9>			口縁無裝飾	松、家屋、船、山、口縁に雷文	
	11	磁器	中瓶(燗徳利)	3.2	17.1	(6.6)		口縁無裝飾	帯線	胴部に一重に「観」、染付、透明釉
	12	陶器	中瓶(徳利)		<12.0>				麻の屋号	屋号は釘書き
	13	磁器	御神酒徳利	1.4	11.8	3.4	5.8	口縁無裝飾	牡丹、松、草履、草	
	14	陶器	小水注	(1.8)	7.4	(4.6)		雲助形	龍、雲	
14	1	陶器	小碗	6.6	4.7	3.0		腰張形		
	2	陶器	小碗	(6.4)	4.8	2.8		腰張形		
	3	磁器	中碗	10.4	4.9	4.3		平形	笹に雪	
	4	磁器	香炉	11.0	5.5	4.8	11.1	有三足 偏平脰形	松、椿、唐草	
	5	陶器	中碗	9.8	5.1	3.9		端反形		
	6	陶器	中碗	9.6	4.7	(3.6)		端反形	折枝梅	
	7	磁器	中碗	10.6	5.9	4.0		端反形	草花文	染付、透明釉
	8	磁器	中碗	10.8	6.3	4.1		端反形	草花文	染付、透明釉
	9	磁器	中碗	11.0	5.5	4.0		端反形	草花文 見込舟	染付、透明釉

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
14	10	磁器	中碗	11.2	5.9	4.1		端反形	草花文 見込寿	染付、透明釉
	11	陶器	小甕	(10.9)	<5.2>	(11.4)		胴丸形		内面～胴部上半、中位にかけて鉄釉
	12	陶器	中甕	(16.0)	<9.1>		(16.4)	胴丸形		瀬戸・美濃系。内外面に鉄釉
	13	陶器	中甕	(22.4)	<8.3>			胴丸形		笹
	14	土器	鉢		<3.5>	(21.2)				
15	1	磁器	中鉢					匂干形、木葉 見込：宝	体部内外：木葉 見込：宝	体部から口縁部にかけて木葉様に表現。見込の木葉は宝文様の垂葉が垂れたものか。
	2	磁器	中鉢	13.3	5.6	5.7		匂干形、輪花	外面：雲、竹 内面：昌壽、月 見込：草、梅	
	3	磁器	小鉢	12.1	5.1	4.7		匂干形、八角	草花格子 武田菱紐	轆轤型押によって成形。
	4	磁器	小鉢	11.7	5.9	4.7		匂干形、八角		轆轤型押によって成形。
	5	陶器	植木鉢	(10.7)	7.7	6.2	1.5	三足脚縁桶形	波状文	外面鉄釉
	6	陶器	植木鉢		9.6	10.0		桶形 腰輪高台	水面、船、 文字	底部内面にも墨書 (判読不明)。19世紀中葉
	7	磁器	大瓶	4.0	26.4	8.4	15.5	鶴首逆蕉形 胴部球状	岩竹	18世紀中葉
16	1	陶器	中水注	9.6	<13.0>		<21.0>	胴部七角形 後手形		
	2	陶器	土瓶蓋	11.3	4.1	(9.5)			松葉、松かさ、満	松かさ形積み。3の土と組む。B9世紀中葉
	3	陶器	土瓶	(11.2)	12.3	(10.5)	21.8	丸形	松葉、松かさ、笹	2の土瓶蓋と組む。19世紀中葉
	4	陶器	土瓶	7.8	11.6	8.3	18.0	茶釜形	船	19世紀
	5	陶器	土瓶					丸形		19世紀末
17	1	陶器	土瓶	(7.4)	10.6	7.5	<17.1>	丸形		19世紀末
	2	炆器	急須蓋	6.6	2.0	1.5	5.6			
	3	炆器	急須	6.2	6.8	6.2	14.3	横手形		注口の下方、底部際に「一光」の印版
	4	炆器	急須		6.2	7.6	12.6	横手形		
	5	炆器	急須	5.8	7.0	8.0	12.8	横手形		胴部、注口、把手それぞれに縦方向の筋りを施す。胎土も2種類の土を練り合わせ全体がマーブル状の模様を呈する。
	6	炆器	急須	7.0	7.7	7.8	11.7	横手形	藻掛け	
	7	炆器	急須	7.0	6.55	8.0	13.0	横手形	藻掛け	
	8	炆器	急須	6.0	6.0	7.0	9.5	横手形	藻掛け	
	9	炆器	急須	6.4	7.1	7.0	11.9	横手形	藻掛け	
18	1	陶器	片口鉢	20.0	11.0	7.9		口縁切込丸形		底部外面を除く全面に灰釉。内面に見込み三足ハマ痕。
	2	陶器	中水注	7.5	8.5	8.3	12.8	後手半筒形		底部を除く全面に灰釉。胎土に黒色粒子が多く含まれる。底部に若干被熱の痕跡
	3	陶器	壺蓋	(8.6)	2.1	(10.1)				天井部に鉄釉。4の壺と組む

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
18	4	陶器	中壺	10.2	15.0	9.8	14.4			3の蓋壺が組む。胴部外面に部分的に鉄軸。
	5	陶器	片口鉢	15.8	8.4	7.7		口縁切込丸形		底部外面を除く全面に灰軸。
	6	陶器	行平鍋	16.4	9.1	6.4		丸形無足	型押し文様	
	7	陶器	行平鍋	(16.6)	<9.2>	(6.2)	<16.7>	丸形無足	型押し文様	
19	1	陶器	中甕	20.0	20.0			甕形無高台		
	2	陶器	中甕	19.9	20.2	10.7	20.0			内面に錆軸。高台部を除きほぼ全体に淡黄色、緑色の軸、鉄軸を重ねる。口縁に鉄軸。底部内面に5ヶ所のハマ跡。
	3	土器	目皿	11.6	1.7					七輪部品。
	4	土器	七輪五徳	14.5	4.2	9.4		朝顔形		七輪部品。
	5	土器	焜炉	(18.0)	18.5			筒型	型押し文様	胴部下位に印籠(拓本参照)。胴部中位に火入れ用の窓(おそらく楕円形)
	6	土器	火鉢	31.6	10.1			口縁内肥厚形		
	7	土器	火鉢	(28.8)	<6.5>			口縁内肥厚形		
	8	土器	焜炉					筒形、口縁部意		胴部下位に印判。判読は不明瞭。
20	1	炆器	小甕	(12.0)	8.2	(6.2)		口縁下括れ 胴部指痕		
	2	炆器	小甕	13.6	10.4			甕形、 胴部押圧		内面に軸葉がかかる
21	1	石	石臼	長軸<19.3>	短軸10.1					破片
	2	緑泥片岩	板碑	残存長19.4	幅10.6	厚さ2.3				破片
	3	灰色泥岩	硯	<14.1>	6.5	2.55		長方形		磨耗著しい。海を欠損。
	4	黑色頁岩	硯					長方形		小さな穿孔(?)痕有り。2次的なものか
	5	瓦質土質品	不明			短軸4.7	厚さ1.9	円盤状		上下面、周囲に面取りの痕跡。用途不明。瓦の2次利用か。

第5表 第2号塚跡出土金属製品観察表

図版	番号	材質	器種	法量(cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
20	3	鉄	用途不明品	残存幅:1.6	孔径:0.3	重量:10.5				2箇所に小孔
	4	銅	用途不明品	残存長:4.9	厚さ:0.1	重量:1.8				
	5	銅	煙管雁首	残存長:3.8	火皿径:1.5	接合部径:1.2	重量:5.9			銅(合金)製
	6	銅	大切羽 (柄側)	長:6.9	刀身幅:0.9	重量:11.1				鍊鈔
	7	銅	大切羽 (鞘側)	長:6.9	刀身幅:1.0	重量:10.9				鍊鈔
	8	銅	小切羽	長:4.0	刀身幅:0.8	重量:2.6				鍊鈔
	9	銅	小切羽	長:4.2	刀身幅:1.0	重量:6.6				鍊鈔
	10	銅	小切羽	長:(4.0)	刀身幅:(0.8)	重量:1.0				鍊鈔
	11	銅	緑金物	長:4.0	高さ:1.1	重量:6.0				鞘口金物の可能性有り。



第6表 第2号堀跡出土古銭観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				銭径	内径	銭厚	量目(g)			
11	9	古銭	水索通寶	2.5	2.1	0.1	2.0			明 1408年
20	12	古銭	聖宗元寶	2.3	1.7	0.1	2.5			北宋 1101年
	13	古銭	祥符通寶	2.4	1.9	0.1	2.1			北宋 1009年
	14	古銭	寛永通寶	2.4	2.0	0.1	1.9			新寛永 1697~1747 1767~1781
	15	古銭	不明	2.3		0.1	1.8			
	16	古銭	不明	2.3		0.1	1.9			
	17	古銭	不明	2.3		0.1	1.1			

第7表 第2号堀跡出土瓦観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	胎土色	備考
				a	b	c	d			
22	1	瓦	軒丸瓦	瓦当厚: 2.7					灰色	刻印有り、やや砂質
	2	瓦	軒丸瓦	瓦当径15.5 瓦当厚<2.9>				連珠三巴16珠	灰色	
	3	瓦	軒丸瓦	瓦当径11.2				連珠三巴右巻き16珠	灰白色	釘穴、圏線有り
	4	瓦	軒丸瓦	瓦当径10.0				連珠三巴右巻き16珠	灰白色	圏線有り
	5	瓦	軒丸瓦	瓦当径11.6	瓦当厚2.0			線無し、連珠三巴左巻き	灰色	圏線無し
	6	瓦	軒丸瓦	瓦当径11.7	瓦当厚2.3			連珠三巴右巻き12珠	灰色	
	7	瓦	軒丸瓦	瓦当径12.2	瓦当厚2.4			連珠三巴右巻き11珠、線なし	灰色	胎土精良、圏線無し
	8	瓦	軒丸瓦	瓦当径11.5	瓦当厚2.3			連珠三巴右巻き16珠	灰色	接合部刻み目、圏線無し
	9	瓦	軒丸瓦	瓦当径11.5	瓦当厚2.0			連珠三巴右巻き13珠	灰色	若干砂質、接合部刻み目
23	1	瓦	棟丸瓦	幅: 16.7					灰色	やや砂質
	2	瓦	丸瓦	残存長: 28.7					灰色	
	3	瓦	鬘斗瓦	長: 26.7 短: 11.7 厚さ: 1.8				A類	灰色	
	4	瓦	棧瓦	瓦当径: 8.0				左巻き三巴8珠	灰色	
	5	瓦	棧瓦	瓦当径: 7.3				左巻き三巴	灰色	やや砂質
	6	瓦	棧瓦	瓦当厚: 4.2					灰色	胎土精良
	7	瓦	棧瓦	瓦当厚: 4.5					灰色	
	8	瓦	棧瓦	瓦当厚: 4.7					灰色	風化進心、やや砂質
	9	瓦	棧瓦	瓦当厚: 4.7					灰色	胎土精良
	10	瓦	棧瓦	瓦当厚: 4.4					灰色	
	11	瓦	道具瓦	全長: 4.8 厚さ: 1.5				三角形平面	灰色	
	12	瓦	面戸瓦	長: 10.8 幅: 7.5 厚さ: 2.3					灰色	やや砂質
24	1	瓦	塀瓦	幅: 25.6 瓦当厚: 5.2					灰色	両辺水切り溝
	2	瓦	塀瓦	幅: 27.8 瓦当厚: 5.0					灰色	両辺水切り溝
	3	瓦	塀瓦	幅: 28.0 厚さ: 2.8					灰色	両辺水切り溝、 側縁倒り込み
	4	瓦	塀瓦	瓦当厚: 4.7					灰色	
	5	瓦	塀瓦	瓦当厚: 4.7					灰色	
	6	瓦	塀瓦	幅: 23.7 高さ: 4.6					灰色	両縁辺水切り溝
	7	瓦	塀瓦	瓦当厚: 5.2					灰色	
	8	瓦	棧瓦	幅: 29.3 厚さ: 1.8					灰色	
	9	瓦	板塀瓦	幅: 26.5 厚さ: 2.5					灰色	

た。前二者は土に含まれるものや、付着した他の鉄製品の錆に由来するものと考えられる。煙管本体は、錆びやすい銅がやや多めの数値になることを考慮に入れても、銅と亜鉛と鉛を用いた合金と考えら

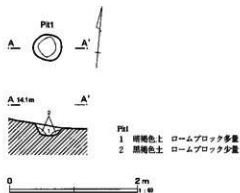
れる。

3は用途不明の鉄製品である。円弧状の延板製品で、両端に約3mmの孔があげられている。

### (3) ビット

#### ビット1

ビット1はC-2グリッドに位置し、第2号堀跡の西側落ち込みにおける、テラス状の段から検出された。長軸42cm、深さは24cmを測る。遺物は出土していない。第2号堀跡の段上から、堀底部へ向かって再び落ち込みが始まる際より検出された。欄列など、堀に伴う施設の可能性もあると考えたが、ビットの検出は報告した1基のみであり詳細は不明である。



第25図 ビット

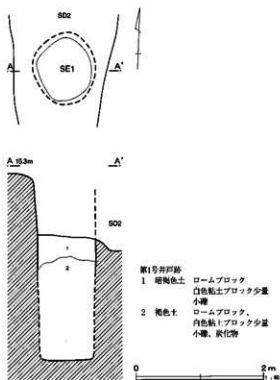
### (4) 井戸跡

#### 第1号井戸跡

第1号井戸跡は、ビット1と同じくC-2グリッドに位置する。第1号井戸跡も、第2号堀跡の西側落ち込みにある段上から検出された。ビット1が検出されたテラス状の段よりも、一段高い位置にあり、表土に近いことから攪乱の影響も強く見られた。

第1号井戸跡が掘られた時期については、校舎基礎工事によって井戸上部が攪乱を受けていたため判然としませんが、城郭の防御・区画施設として造営された堀の内部に井戸をつくるということも考えにくい。おそらくは、川越城が廃城となり、堀も埋め立てられた後に掘られたものと考えられる。

遺物は近代のものと思われる磁器片等が数点出土しているが、時期を確定できるほどの遺物は出土していない。



第26図 第1号井戸跡

## V 調査のまとめ

### 1. 川越城跡の堀跡と土塁について

今回の川越城跡の調査は溝跡1条、堀跡2条、土塁跡1基、井戸跡1基、ピット1基である。このうち堀跡1条が中世、他は近世の遺構である。川越城に関する史料は、近世以降にこそ絵地図や屏風絵などに散見されるが、築城当時の川越城については殆ど分かっていない。一般的には室町時代末期の長祿元年(1457)、上杉氏の家臣であった太田道真・道灌父子による築城が始まりとされている。中世期の川越城に関する史料は軍記物などによるところが多いため、信頼度について疑問視されていた。しかし現在までの研究で、古河公方に対抗する要となる城を室町幕府が上杉氏につくらせたことが分かっている(川越市博1992)。実際に築城に当たったのが、史料にもあるように上杉家臣であった太田道真・道灌父子であり、特に道真が中心となっていた可能性が高い。築城当初の景観については不明な点が多いが、「川越城図」などの古絵図などと照合すると今回の調査区は三郭の南側、八幡曲輪の部分に当たる。八幡曲輪にあたる場所は、「川越城図」や「武蔵国川越城図」などでは馬場と記されている。調査区は絵地図にある馬場の西側境界線付近に当たるが、現在の川越地図を絵地図と照合すると、第1号・2号堀跡ともに八幡曲輪の西側を走る空堀に当たる(川越市博1997)。八幡曲輪を区画する堀跡の一部は第9次・12次調査においても検出されており(金子直行2001)、八幡曲輪の沿革が絵地図通りと想定するならば、両者は連結するはずである。

土塁跡の下から検出された第1号堀跡は、底部付近において出土した遺物から見る限り16世紀前半から17世紀頃の年代が推定されるが、これは川越の支配が上杉氏から後北条氏、徳川家と変わっていく時期と重なる。これに対し第2号堀跡は、出土遺物から18世紀から19世紀の年代が比定される。土層断面に見られる埋め立ての状況で明治初頭の廃城の埋め

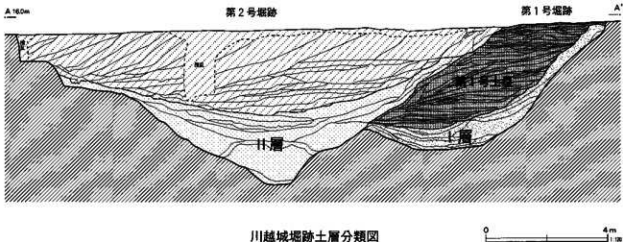
立てとし、出土遺物の大半が廃城の際に廃棄されたと考えるなら、2号堀が近世における川越城の最終的な姿の一部ということになる。そうすると、17世紀中頃に行われた実質的に最後の改修工事であった松平信綱によるものであろう。寛永十六年(1639)に始まった信綱の改修は、外曲輪・田曲輪・新曲輪を増築し、川越城を全体的に西に向けて拡張した。本来1号堀であった堀も西側に向けて拡張されており、信綱の改修である可能性は高いと思われる。では実際に、堀改修の流れはどのように行われたのか、検出された遺構から時間の流れをまとめてみたい。

寛永十六年に改修が始まると、断面が緩やかな台形である1号堀の西側立ち上がりは完全に破壊され、西側に向けて大きく2号堀跡が堀削された。2号堀跡は深さにして約1.5m深くなり、東西の幅は1号堀跡が推定10m前後であるのに対して2号堀跡の幅は19.4mと約2倍に拡張されている。断面形状は緩やかな台形から逆三角形の鋭角な形に変わる。底部は一段深く幅約1m前後に窪み、周辺の土壌の変質や砂利が底部に堆積していたことなどから、常時浅く冠水していたと思われる。もともと冠水の痕跡が見られるのは堀底部のみであるため、水堀りであったとは考え難い。1号堀も版築状に埋め立てられ、その上には土塁が築かれた。土層観察では、版築状の土塁基部が築かれる前に図上で1層とした流土が堆積している。自然堆積か人為的なものかの判断は困難だが、自然堆積とするなら長期にわたって堀を覆いもせず放置していた時期があることになり、考え難い。やはり基部構築前に、人為的に土が入られたものと考えられる。

19世紀に幕府が消滅し、300年続いた幕藩体制も終焉を迎えるに当たり、川越城も400年に及ぶ歴史を閉じる。土層には、八幡曲輪側から土塁を崩して埋め立てている様子が明瞭に表れている。しかし、

Ⅱ層とした層から下は土塁を構築する白色粘土とロームが混入しておらず、ある程度レンズ状に堆積している。2号堀最底部における砂利の堆積や土壌の変質などの点からもⅡ層以下は自然堆積と考えられ、堀埋め立てまでの期間、放置されていたことが考えられる。放置された時期については明確にすることは困難であるが、2号堀の遺物はⅡ層以下からの出土が多く、少なくとも改修してから年月を経た19世紀、埋め立て前の段階である可能性が高いと思われる。現在までに川越市によって行われた発掘成果によれば、後北条氏の頃と推定される「障子堀」

が第11次・13次調査で見つかった（天ヶ嶋2003）、今回調査では、障子堀は検出されなかった。また今回検出された堀のように、中世の堀が版築状に埋め立てられ、新たに近世堀を築く例は第13次調査においても確認されている（川越市遺跡調査会1999）。同じく川越市による第17次調査では、堀跡とともに土塁跡も検出されている（川越市教育委員会2004）。中世における川越城の資料は、未だ圧倒的に不足しているが、今後着実に資料を増やしていくことが中世川越城の姿を把握する上で必要不可欠であろう。



川越城堀跡土層分類図

## 2. 川越城跡の出土遺物について

川越城跡の出土遺物は、本章の冒頭でも述べたが陶磁器類と瓦とに大別できる。本項では陶磁器などの出土遺物、特に茶器について述べてみたい。

現在、茶道とされ一般に親しまれている喫茶の風習は、本来は禅などととも中国からもたらされ、禅宗系寺院における修行の一環として行われていた。しかし、中世に禅が武家社会に浸透し始める頃から、武家や上層階級間で教養・趣味として盛んに行われるようになった。特に戦国時代では、豊臣秀吉を代表するように戦国大名の間で盛んに茶の湯が行われたことはよく知られている。また茶の湯が盛んになるにつれ、道具類についても各地で製作されるようになった。

18世紀に玉露の製法が開発され、茶葉を煎じる喫茶法が発明され、次第に店舗や売り歩きによって商われるようになった。こうして新たな作法の茶として煎茶道が確立される。煎茶の他、煎じた茶を点てて飲む「振り茶」と呼ばれる喫茶法や、「淹茶」と呼ばれる喫茶法も流行した。淹茶は今日でも一般的に行われるように、急須に茶葉を入れ、湯を注いで淹すものである。さらに街道沿いや寺社・行楽地、都市部にまで茶屋が開かれ、煎茶は庶民の間にも定着していった（江戸遺跡研究会2001）。

川越城の調査における煎茶の痕跡は、急須、土瓶、焜炉、焜炉付属品、茶碗となる。今回の調査では、急須8点、土瓶5点が第2号堀跡の底部から出土した。

急須・土瓶の形状をそれぞれ見ると、注口があり、胴部との接合点内面に「濾し穴」を有する点は共通することから、茶葉を入れて煎じるという機能も同様と思われる。土瓶については第13図-2、3が19世紀中葉、他は19世紀末頃の年代が当てはまると思われる。急須は第17図-2～9で、2は蓋のみの出土となっている。急須が遺跡から発見されるのは、江戸遺跡では18世紀中葉以降とされる。今回出土の急須は土瓶やその他の陶磁器類とともに出土しているが、産地等は不明、年代についても他の出土遺物と同様の19世紀頃を当ておきたい。茶碗については、第14図-5、6の碗はおそらく喫茶に用いたものと思われるが、これ以外の碗類は喫茶にはあまりそぐわない形状、大きさであり、茶碗とは判別できなかった。もっとも、当時は現在のように湯飲み茶碗のように喫茶用として明確な器種があるわけではなく、一概には区別できない。その他、煎茶道具として第19図-5 焜炉が出土している。5は胴部筒型の土師質製焜炉であり、二重構造になっている。胴部には窓が開けられ、この窓から空気を送り込む。空気を送るのは風口（かざぐち）と呼ばれる方形筒状の道具だが、今回は出土していない。第19図-3 目皿は焜炉内部に置いて上に炭をのせるもので、多

### 3. 川越城跡出土の瓦について

今回の発掘調査では第2号堀跡から多くの瓦が出土した。コンテナにして6～7箱と、出土遺物全体の半分以上となる。2号堀出土の瓦は残存状態が悪く、復元率も低いものが多かったことから、掲載資料は残存状態の良いもの、瓦当文様などの分かるものを選出した。

掲載した瓦は、すべて第2号堀跡からの出土となる。陶磁器類など他の遺物と同様、自然堆積と思われるⅡ層を中心として出土している。第9次・12次調査における瓦敷遺構、廃棄遺構から見つかった瓦も多種多様であったが、今回の調査における2号堀からも軒丸瓦、軒棧瓦、丸瓦、棧瓦、平瓦、塀瓦、

数の孔を開けることで下方から風口によって送られた空気を取り込み、燃焼を促進させる。目皿を支えるのが4の七輪五徳で、焜炉内部に嵌め込んで使用する。七輪五徳は時期によって高さに差が見られ、18世紀前葉には7cm、中葉には5cm前後、18世紀末から19世紀では3～4cmとなる。今回出土の七輪五徳は4.2cmであり、18世紀末から19世紀の年代が当てられる。焜炉には煎茶で使用する「涼炉」と呼ばれるものがあり、比較的小型で体部が二重構造、目皿を用いる。外面は磨かれ、様々な模様や印を刻したものが多く（江戸遺跡研究会2001）。今回出土した焜炉も同様の特徴を有することから、煎茶用の焜炉「涼炉」と判断した。涼炉には煎茶用の急須を用いたとされるが、出土した急須には被熱の痕跡はない。急須ではなく、土瓶などを用いた可能性が考えられる。今回出土した煎茶関係の遺物は、急須、土瓶、茶碗、涼炉と付属品のみだが、川越城の堀は廃城の際に廃棄場として使用された可能性が高く、破損した道具類をまとめて捨てたと考えられる。加熱器具から茶器までがまとめて出土したことは、19世紀当時、今日にも通じる煎茶が盛んであったことを窺わせることに十分な資料であると考えられる。

棟丸瓦、鬘斗瓦、面戸瓦、道具瓦の10種類の瓦が確認された。以下、川越城跡出土の近世瓦について、第9・12次調査において行われた川越城出土近世瓦の分類（大谷2001）を基に、まとめてみたい。

軒丸瓦はすべて長いものであり、判別不能の破片も含めて総数65点、大小がある。すべて連珠三巴文で、三巴周囲に圏線を持つものと、持たないものに分かれる。非掲載遺物も含めて有圏が25点、無圏が31点を数える。有圏は大型品が1点のみで、中型品が2点、小型品が22点となり、小型品を合わせると有圏軒丸瓦全体の88%を占めている。一方、無圏軒丸瓦については90%が小型品であり、中型品は3点

のみとなっている。巴文は、有圏では右巻きが、無圏では左巻きが主体を占める。連珠は16個が有圏・無圏ともに最も多く、16個以外には13個、12個、11個が見られる。この内、11個は無圏右巻き小型の1点のみである（以上、第7表参照）。また、22図の1には「丸に一引き」の刻印が確認されている（金子智1997）。

軒椀瓦は破片のみが出土している。総数14点であり、この内7点を掲載している（23図-4～10）。巴文が残存しているのは内3点のみで、左巻巴文8珠が1点、珠文無しが2点であり、平瓦の瓦当文様については、江戸式と在地的な唐草文の2種類が見られる。

丸瓦については、ほぼ完存するもの（23図-2）が1点見られる他は、掲載・非掲載含め破片が34点、計35点が出土している。

椀瓦は完形品と破片の計2点が出土している。完形品は対角線2箇所に切り込みを有し（24図-8）、破片は椀部の屈曲部である。

平瓦は破片のみであり、破片数にして45点が出土、すべて非掲載遺物となっている。

髷瓦については、2種類が確認されている。1種は隅の角を切り落としたもので、2.5cmの厚みを持ち、重量感がある（24図-9）。もう1種は直角の

隅で2.0cmと薄いものである。瓦当部の文様については、A2類が1点、B1類が1点（24図-2）、B2類が4点（24図-3）、B3類が2点となり、B類は7点となる。C類が1点（24図-1）、D2類が14点（24図-4～6）、E類が1点、F1類が1点（24図-7）、G類が1点となり、D2類が最も多い。この他、判別不能も含めると、総数49点が出土している。

棟丸瓦は2点出土しており、うち1点を掲載している（23図-1）。丸瓦部分の両端に、弧状の挟り込みが見られる。

髷斗瓦は10点出土しており、うち1点は完形となる（23図-3）。

この他、面戸瓦が1点（23図-12）、小型の三角形を呈する道具瓦が1点（23図-11）出土している。

今回の調査で出土した近世瓦は、共存する出土遺物から18世紀から19世紀にかけて使用されたものと思われる。また、堀堀め立て土中からも出土している点から、明治初頭における廃城の際に廃棄されたものである可能性が高い。以上、川越城跡第20次調査出土の瓦について述べてきたが、これまでに蓄積された調査成果を基にして概略的にまとめる結果になってしまった。今後、更なる成果の蓄積を待ち、川越城の瓦全体像を検討してみたい。

## 引用・参考文献

- 天ヶ嶋 岳 2003 「川越城「堀」小考」『川越城跡 第11次調査』川越市遺跡調査会発掘調査報告書 第27集 川越市遺跡調査会
- 天ヶ嶋 岳 2000 『河越館跡史跡整備に伴う発掘調査 第1次～第4次調査』河越館跡調査報告書第1集
- 天ヶ嶋 岳 2001 「川越城跡 太田道真・道灌以後の大改修」『図説 川越の歴史』(株)郷土出版社
- 井口 信久 2001 「松平信綱・輝輝・信輝と川越藩」『図説 川越の歴史』(株)郷土出版社
- 井口 信久 2001 「城下町の整備 町割の整備」『図説 川越の歴史』(株)郷土出版社
- 井口 信久 2003 『川越城跡 第15次発掘調査報告書』川越市遺跡調査会発掘調査報告書 第29集 川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房株式会社
- 大谷 徹 2001 「川越城出土の近世瓦について」『川越市/桶川市 川越城/小在家Ⅱ 県立川越高等学校・桶川西高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告』第273集 埼玉県・(財)埼玉県埋蔵文化財調査団
- 大橋 康二 1994 『古伊万りの文様』理工学社
- 金子 智 1997 「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第43輯 第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科
- 金子 直行 2001 「川越城の発掘成果について」『川越市/桶川市 川越城/小在家Ⅱ 県立川越高等学校・桶川西高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告』第273集 埼玉県・(財)埼玉県埋蔵文化財調査団
- 川越市教育委員会文化財保護課 1999 「川越市文化財保護年報」平成10年度 川越市教育委員会文化財保護課
- 川越市教育委員会文化財保護課 2003 「川越市文化財保護年報」平成13年度 川越市教育委員会文化財保護課
- 川越市教育委員会文化財保護課 2004 「川越市文化財保護年報」平成14年度 川越市教育委員会文化財保護課
- 川越市立博物館 1992 『第五回企画展 川越城-失われた遺構を探る-』川越市立博物館
- 川越市立博物館 1997 『町割から都市計画へ -絵地図でみる川越の年形成史-』川越市立博物館
- 小泉 功 2000 『川越城二の丸跡発掘調査報告書』川越市立博物館
- 小林 康幸 2001 「瓦の生産」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版
- 埼玉県 1988 『新編埼玉県史 通史編3 近世1』
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『東京都新宿区 内藤町遺跡 -放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-』第11分冊 東京都建設局・新宿内藤町遺跡調査会
- 田中 信 2001 「小江戸川越のメインストリートを掘る 元町二丁目遺跡」『図説 川越の歴史』(株)郷土出版社
- 坪井 利弘 1976 『日本の屋根瓦』理工学社
- 坪井 利弘 1977 『図鑑瓦屋根』理工学社

## 写真図版





第2号堀跡 完掘 (南東から)



第2号堀跡土層断面 (南から)



第1号堀跡・第2号堀跡・第1号井戸跡



第2号堀跡土層断面（北から）



第1号堀跡・第1号土塁土層断面



第1号土塁基部土層断面



第1号溝跡（南から）(1)



第2号堀跡刀装具出土状況



第1号溝跡（北から）(2)



第1号清跡出土遺物 第6図1~3



第1号堀跡出土遺物 第10図5



第1号堀跡出土遺物 第11図3



第1号堀跡出土遺物 第11図6



第1号堀跡出土遺物 第11図4



第1号・第2号堀跡出土遺物



第1号掘跡出土遺物 第10図、第11図



第2号掘跡出土遺物 第13図12



第2号掘跡出土遺物 第14図4



第2号掘跡出土遺物 第13図13



第2号掘跡出土遺物 第13図14



第2号堀跡出土遺物 第12图 3-16



第2号堀跡出土遺物 第14图



第2号堀跡出土遺物 第15图 7



第2号堀跡出土遺物 第16图 2-3



第2号堀跡出土遺物 第19图 1



第2号堀跡出土遺物



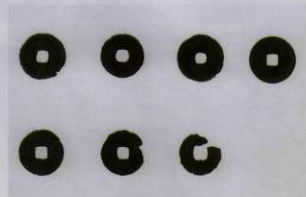
第2号堀跡出土遺物 第17図3



第2号堀跡出土遺物 第17図5



第2号堀跡出土遺物 第18図2



第2号堀跡出土遺物 第19図、第20図



第2号堀跡出土遺物 第20図6~11





第2号堀跡出土遺物 第17図2~9



第2号堀跡出土遺物 第16図、第17図



第2号堀跡出土遺物 第22図1



第2号堀跡出土遺物 第22図2



第2号堀跡出土遺物 第22図6



第2号堀跡出土遺物 第22図7



第2号堀跡出土遺物 第24図8



第2号堀跡出土遺物 第24図9





第2号掘跡出土遺物 第22図3



第2号掘跡出土遺物 第22図4



第2号掘跡出土遺物 第22図5



第2号掘跡出土遺物 第23図1



第2号掘跡出土遺物 第23図2



第2号掘跡出土遺物 第23図4



第2号掘跡出土遺物 第23図5



第2号掘跡出土遺物 第23図10



第2号掘跡出土遺物 第23図7



第2号掘跡出土遺物 第23図8



第2号掘跡出土遺物 第23図9



第2号掘跡出土遺物 第24図1



第2号掘跡出土遺物 第24図2



第2号掘跡出土遺物 第24図3



第2号掘跡出土遺物 第24図6



第2号掘跡出土遺物 第23図11、12

## 報告書抄録

ふりがな	かわごえじょうあと							
書名	川越城跡Ⅱ							
副書名	県立川越高等学校校舎改築工事事業関係埋蔵文化財調査報告							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第300集							
編著者名	栗岡 潤・安生 潔明							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1				TEL0493-39-3955			
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわごえじょうあと 川越城跡	さいたまけんかわごえし 埼玉県川越市 郭町2-6他	11201	19-89	35° 55' 16"	139° 29' 34"	20021007～ 20021220	700	学校建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川越城跡	城跡	中・近世	堀跡 2条	溝跡 1条	土塁跡 1基	井戸跡 1基	陶磁器 瓦 石製品 銅・鉄製品	中世後半から幕末にかけて存続した川越城の八幡曲輪の調査。堀跡から17世紀以降の陶磁器・瓦が多量に出土。また、土塁跡の存在も確認した。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第300集

---

川越市

---

**川越城跡Ⅱ**

---

県立川越高等学校校舎改築工事事業関係埋蔵文化財調査報告

平成17年3月25日印刷

平成17年3月31日発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／アサヒ印刷株式会社